

ありふれた生成(機械)魔法士を

禍津伊邪那岐大神

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「全部、失くした」

奈落に突き落とされた南雲　　ハジメを助けるべく自らも奈落へ落ちた風間　　ライキ（かざま　　らいき）はクラスメイトに復讐を誓う

「元の世界に戻る前に手前エらぶち殺してやる」

目次

第一章

復讐

第1話	1
第2話	6
第3話	9
第4話	13
第5話	20
第6話	27
第7話	34
第8話	43
第9話	53
第10話	62
第11話	67
第12話	74
第13話	85
第14話	93
人物紹介	102
第16話	105
S i d e S t o r y クリスマスメイト編	
第17話	109
第18話	119
第19話	131
第20話	143

第一章 第1話

復讐

月曜日。それは一週間の内で最も憂鬱な始まりの日。きっと大多数の人が、これからの一週間に溜息を吐き、前日までの天国を想ってしまう。俺だってそうだ。

俺と唯一の友達であるハジメは共に徹夜で疲れている体を無理やり動かし教室の扉を開ける。その瞬間、教室の男子生徒の大半から舌打ちやら睨みやらを頂戴する。女子生徒も友好的な表情をする者はいない。無関心ならまだいい方で、明からさまに侮蔑の表情を向ける者もいる。

極力意識しないように自席へ向かう俺とハジメ。しかし、毎度のことながらちよっかいを出してくる者がいる。シネバイイノニ

「よお、キモオタ！ また、徹夜でゲームか？ どうせエロゲでもしてたんだろ？」

「うわっ、キモく。エロゲで徹夜とかマジキモイじゃん」

一体何が面白いのかゲラゲラと笑い出す男子生徒達。声を掛けてきたのは檜山大介ひやまだいすけといい、毎日飽きもせず日課のよう

にハジメに絡む生徒の筆頭だ。近くでバカ笑いをしているのは斎藤良樹さいとうよしき、近藤礼一こんどうれいいち、中野信治なかのしんじの三人で、大体この四人が頻繁にハジメに絡む。

檜山の言う通り、俺とハジメはオタクだ。と言つてもキモオタと罵られるほど二人は身だしなみや言動が見苦しいという訳ではない。ハジメは大人しくはあるが陰気さは感じさせない。単純に創作物、漫画や小説、ゲームや映画というものが好きなだけだ。

それに対し俺は漫画やアニメは勿論今はハジメに教えて貰って只今ガンプラ作りに超夢中。今のところはガンダムAGEの機体は全て作ったしアニメも漫画も小説も全て見た。なんでAGEだけかって？カツコイイカライイジャマイカ（*・ω・*）キリツとゆうか目の前のゴミ（檜山と愉快的仲間たち）が邪魔ですハイ何故俺とハジメにこんなにクラスのアたりが強いかというと目の前から既に答えが来ていた。

「南雲くん、風間くん、おはよう！ 今日もギリギリだね。もつと早く来ようよ」

それがこの答え、白崎香織（しらさきかおり）という。学校で二大女神と言われ男女問わず絶大な人気を誇る途轍もない美少女だ。

そんな香織は何故かよくハジメ（次いでに俺も）を構うのだ。徹夜のせいで居眠りの多い俺とハジメは不真面目な生徒と思われており（成績は平均を取っている）、生来の面倒見のよさから香織が気に掛けていると思われている。

これで、二人の授業態度が改善したり、あるいはイケメンなら香織が構うのも許容できるのかもしれないが、生憎、二人の容姿は極々平凡であり、“趣味の合間に人生”を座右の名（自分もそれに共感している）としていいることから態度改善も見られない。そんなハジメが香織と親しくできることが、同じく平凡な男子生徒達には我慢ならぬのだ。“なぜ、アイツだけ！”と。女子生徒は単純に、香織に面倒を掛けていることと、なお改善しようとしないうことに不快さを感じてい

るようだ。

「あ、ああ、おはよう白崎さん」

「……どうも」

うーん、殺気が相変わらずビシバシきてるなあ。こここのクラスメイトは全員カルシウム不足なのかな？と思うくらいに殺気だが流石に毎日浴び続けたらなれるものだ。慣れって怖いねー

「南雲君、風間君。おはよう。毎日大変ね」

「香織、また彼らの世話を焼いているのか？ 全く、本当に香織は優しいな」

「全くだぜ、そんなやる気ないヤツらにやあ何を言っても無駄と思うけどなあ」

こちらにやって来た三人の中で唯一朝の挨拶をした女子生徒の名前は八重樫雫（やえがししずく）。香織の親友だ。ポニーテールにした長い黒髪がトレードマークである。切れ長の瞳は鋭く、しかしその奥には柔らかさも感じられるため、冷たいというよりカツコイイという印象を与える

次に、些か臭いセリフで香織に声を掛けたのが天之河光輝（あまのがわこうき）。如何にも勇者っぽいキラキラネームの彼は、容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能の完璧超人だ。

最後に投げやり気味な言動の男子生徒は坂上龍太郎（さかがみりゅうたろうといい）、光輝の親友だ。短く刈り上げた髪に鋭さと陽気さを合わせたような瞳、百九十センチメートルの身長に熊の如き大柄な体格、見た目に反さず細かい事は気にしない脳筋タイプである

「風間君？」

「……んあ？」

「おはようっー」

「……おう」

「お・は・よ・う！」

「……おはよう」

八重樫さん、俺がいったい何をしたんだ（；；；；）

挨拶だけでここまで迫られるなんて……ほら殺気が膨れ上がってるじゃないですかやだー（棒）

そうこうしている内に始業のチャイムが鳴り教師が教室に入ってきた。教室の空気のおかしさには慣れてしまったのか何事もないように朝の連絡事項を伝える。そして、何時ものようにハジメが夢の世界に、俺はガンブラ改造の為の設計図を書き、当然のように授業が開始された。

学校のお昼には至福を感じる生徒も多いだろう。しかし俺とハジメの場合は只の休み時間でしかない。ハジメは午後のエネルギーを10秒でチャージして、俺は小さい菓子パン一つで済ませる。本当はもつと食べたいがガンブラを買いすぎて今月のおこずかいがピンチなのである。（後悔など断じてない）

昼食を食べ終えて再び設計図作りに戻る不意にハジメの席（俺の席の後ろ）から会話の声が聞こえる。ヤツだ（白崎さんです）

ハジメが助けると視線を送ってくるので加勢しようとした瞬間

教室全体を囲うような魔法陣が現れ俺たちは何処かに飛ばされてしまった・・・

第2話

思わず目を瞑る。余りに眩い光である。

「あだっ！」

次に椅子に座っていた感覚が無くなり地面に尻餅をつく。

光がはれるとそこは雪国でした・・・とゆうわけでも無く神秘的な場所に目を疑うクラスメイト達。俺もハジメも例外無く驚く。

「ようこそ、トータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎致しますぞ。私は、イシユタル・ランゴバルドと申す者。以後、宜しくお願い致しますぞ」

(なんだこいつ(´・ω・´))

クラスメイト達の前には三十人近い人々が、祈るような形で居座っており先頭の老人が話をしている。

「さて、あなた方においてはさぞ混乱していることでしょう。一から説明させて頂きますのでな、まずは私の話を最後までお聞き下され」
そう言っただけで始めたイシユタルの話は実にファンタジーでテンプレで、どうしようもないくらい勝手なものだった。

要約すると、魔人族倒してオラ達を救ってくれd(´・ω・´)の事である。

うん、FU☆ZA☆KE☆N☆NA☆ミ(´・ω・´)キラツ☆
実際クラスメイトも嫌だったようで反抗している。中でも社会科の教師でもある愛子先生は凄くもう反抗している。当然だ。

俺だってまだガンダムレギルスのガンプラを作り終えてないからさっさと帰りたいのである。

「お気持ちはお察しします。しかし・・・あなた方の帰還は現状では不

可能です」

場に静寂が満ちる。重く冷たい空気が全身に乗りかかっているようだ。誰もが何を言われたのか分からないという表情でイシユタルを見やる。

「ふ、不可能って……ど、どういうことですか!? 喚べたのなら帰せるでしょう!?!」

愛子先生が叫ぶ。

「先ほど言ったように、あなた方を召喚したのはエヒト様です。我々人間に異世界に干渉するような魔法は使えませんのでな、あなた方が帰還できるかどうかもエヒト様の御意志次第ということですね」
「そ、そんな……」

(・ω・) そんなーまだガンプラ作りたかったのにー

パニックになる生徒達、俺とて例外では無い。ちらりと横を見るとハジメも驚いてあるが幾分か冷静である。(白崎さんが笑顔でハジメを見ているが気のせいであろう)

「皆、ここでイシユタルさんに文句を言っても意味がない。彼にだってどうしようもないんだ。……俺は、俺は戦おうと思う。この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実なんだ。それを知って、放って置くなんて俺にはできない。それに、人間を救うために召喚されたのなら、救済さえ終われば帰してくれるかもしれない。……イシユタルさん? どうですか?」

「そうですね。エヒト様も救世主の願いを無碍にはしませんよ」

「俺達には大きな力があるんですね? ここに来てから妙に力が漲っている感じがします」

「ええ、そうですね。ざっと、この世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持っていると考えていいでしょうな」

「うん、なら大丈夫。俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように。俺が世界も皆も救ってみせる!!」

ギョツと握り拳を作りそう宣言する光輝。無駄に歯がキラリと光る。それにどんだん賛同するクラスメイト達。

言ってもわからぬタラバガ二つてこういう事なんだなーと傍観する俺とハジメであった。

さて、戦うと言った以上はその術を学ばなくてはならない。

イシユタルに促されて先へ進むと、柵に囲まれた円形の大きな白い台座が見えてきた。大聖堂で見たのと同じ素材で出来た美しい回廊を進みながら促されるままその台座に乗る。

台座には巨大な魔法陣が刻まれていた。柵の向こう側は雲海なので大多数の生徒が中央に身を寄せる。それでも興味が湧くのは止められないようでキョロキョロと周りを見渡していると、イシユタルが何やら唱えだした。

「彼の者へと至る道、信仰と共に開かれん、『天道』」

その途端、足元の魔法陣が燦然と輝き出した。そして、まるでロープウェイのように滑らかに台座が動き出し、地上へ向けて斜めに下っていく。どうやら、先ほどの『詠唱』で台座に刻まれた魔法陣を起動したようだ。クラスメイト達が興奮する中俺は冷静に考える。

(何故エヒト神とやらは俺たちを選んだ?)

考える。何故平凡な学生達を選んだのか? 神ならば召喚する人材くらい選べるはずだ。それをしないという事は……

(遊びでやってんのか……?)

「風間君?」

「……ん?」

思考を中断すると八重樫が横から声を掛けている。

「もう皆行ってるけど……」

どうやらもう着いたらしくクラスメイト達は前を歩いていってる。

「おっと、悪い」

憶測に過ぎないと頭を横に振ってクラスメイトの一番後ろにハジメとくっついて行った

第3話

「よし、全員に配り終わったな？ このプレートは、ステータスプレートと呼ばれる。文字通り、自分の客観的なステータスを数値化して示してくれるものだ。最も信頼のある身分証明書でもある。これがあれば迷子になっても平気だからな、失くすなよ？」

非常に気楽な喋り方をしているのは騎士団長メルド・ロギンス。彼は豪放磊落な性格で、「これから戦友になろうつてのに何時までも他人行儀に話せるか！」と、他の騎士団員達にも普通に接するように忠告するくらいである。

そしてたった今全員に支給されたステータスプレートの説明の真っ最中だ。

「プレートの一面に魔法陣が刻まれているだろう。そこに、一緒に渡した針で指に傷を作って魔法陣に血を一滴垂らしてくれ。それで所持者が登録される。 “ステータスオープン” と言えば表に自分のステータスが表示されるはずだ。ああ、原理とか聞くなよ？ そんなもん知らないからな。神代のアーティファクトの類だ」

「アーティファクト？」

アーティファクトという聞き慣れない単語に光輝が質問をする。

「アーティファクトって言うのはな、現代じゃ再現できない強力な力を持った魔法の道具のことだ。まだ神やその眷属達が地上にいた神代に創られたと言われている。そのステータスプレートもその一つでな、複製するアーティファクトと一緒に、昔からこの世界に普及しているものとしては唯一のアーティファクトだ。普通は、アーティファクトと言えば国宝になるもんなんだが、これは一般市民にも流通している。身分証に便利だからな」

団長説明中……………

全員が納得したように頷き各々が自身の指に針を刺しプレートに血を垂らす。するとプレートが輝きだし文字が浮かび上がる。

(俺のステータスは・・・)

風間 ライキ 17歳 男 レベル：1

天職：生成(機会) 魔法士

筋力：10 (■●■■■)

体力：10 (■●■■■)

耐性：10 (■●■■■)

敏捷：10 (■●■■■)

魔力：■●■■■

魔耐：■●■■■

技能：生成魔法(機械)・System (■●■■■)

System (■●■■■)・言語理解

(なあにこれえ (《●》)) ((《●》))

自身のステータスプレートを見て頭に？しか浮かばない。殆どが文字化けを起こしているのだから。明らかにバグったみたいなのでメルド団長に聞いて見る。

「すみませんメルド団長」

「ん？なにかあったか？」

きよとんとしたメルド団長に自分のステータスプレートのみせる。メルド団長も頭に？を浮かべるどうやらメルド団長にも分からないらしい。

「ステータスプレートが故障するなんて聞いたことないが・・・まあいい、新しいものを近日中に支給するからそれは暫く持つていてく

れ」

「うっす」

渡された日から故障とは幸先が思いやられるなど思い込んでいると・・・

「おいおい、南雲。もしかしてお前、非戦系か？ 鍛治職でどうやって戦うんだよ？ メルドさん、その錬成師って珍しいんっすか？」

「……いや、鍛治職の十人に一人は持っている。国お抱えの職人は全員持っているな」

「おいおい、南雲く。お前、そんなんで戦えるわけ？」

ああ・・・またクソうるせえ奴らが・・・

ハジメを取り囲んで檜山達がハジメを冷やかし始める

「ぶっはははっく、何だこれ！ 完全に一般人じゃねえか！」

「ぎやはははく、むしろ平均が10なんだから、場合によっちゃその辺の子供より弱いかもなく」

「ヒアハハハく、無理無理！ 直ぐ死ぬってコイツ！ 肉壁にもならねえよ！」

次々と笑い出す生徒に香織が憤然と動き出す。まあ・・・俺の方が早かったのだが。

「おい」

「・・・あ？」

「謝れよ」

その場が瞬時に沈黙する。当然だ、俺がこんなこと言うのはこれが初めてだからだ。今まではハジメの迷惑になると思っていたがここは既に学校でもない。抑える理由もない。

「おいおい、誰に謝れって？」

「もしかしてそこにいる非戦闘系ハジメちゃんでしゅか？」

再び場が笑いに包まれる。ああ……マジでぶち殺してえ殺したい……いや、コイツらはいつか殺す……絶対に

第4話

あの後先生によってクラスメイト達のハジメによる罵倒等は収まったが俺の中には未だにクラスメイト達への殺意が渦巻いていた。あれから二週間が経ち俺とハジメは訓練の休憩時間に王立図書館にて調べものをしていると言っても俺は殆どハジメの付き添いだがあんなクズ共というよりかは数億倍マシだった。

「ライキ?」

「・・・ん?」

気が付けば本を読み終えてハジメがこっちを見ている。

「この前はありがとう・・・ちゃんとお礼言えてなかったから・・・」
「友達助けるのに礼とか要らんとするが・・・そうだなあ・・・日本に帰ったらガンププラー箱な?」

「あはは・・・安いやつにしてよ?」

「安心しろ、量産型とかそこら辺だ」

そんな他愛な叶いそうにない会話をしながら不意に自身のステータスプレートを眺める。

技能：錬成、言語理解

こんな感じである。檜山達にバカにされていたが自分はカッコいいなと思っている、ハ○レンみたいで。

「やっぱり刻み過ぎだよなあ・・・」

「俺のバグステよりかはマシだろうに・・・」

『はあ・・・』

二人揃ってため息である。無理もない、二週間みっちり訓練してこれなんだから。因みにチート地味ていた光輝のステータスは

天之河光輝 17歳 男 レベル：10
天職：勇者
筋力：200
体力：200
耐性：200
敏捷：200

魔力：2000

魔耐：2000

技能：全属性適性・耐性・物理耐性・複合魔法・剣術・剛力・縮地・先読

高速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・言語理解

うん、完全にチートだ。（そんなもん、チートやろ！チーターやろ！）と幻聴まで聞こえてきそうだ。と、そうこうしている内に訓練の時間がそこまでできていた

「すまん、トイレ行ってくるから先に行つてくれ」

「うん、わかった」

そう短くすませて俺は用を足しに、ハジメは先に訓練場に行く、手短かにトイレを済ませた俺は訓練場に赴く。まだ始まる少し手前なのでハジメと自主錬でもするかなあとと思い訓練場に入る・・・が

「・・・あん？」

ハジメが居ない。いつもとは違う場所にいるのか？と思い探したが何処にも居ない。途中で追い越したか？とも思ったがそれは有り得なかった、ハジメの足ならば俺が用を足している間に此処へ充分に来れるはずである。それが無いとなると・・・

「まさか・・・」

最悪の事態を予想する。そして・・・

が起きた

自身が最も恐れていたこと

「ほら、さっさと立てよ。楽しい訓練の時間だぞ?」

「ぐあ!?!」

その声を聞いた瞬間俺は既にその方向目掛けて走り出していた。そして見つけた、訓練施設の死角となる場所に檜山と取り巻きの三人、そして・・・魔法をくらって地面に倒れ伏すハジメ。それを見た時は既に・・・

事の発端を作った檜山達に向かって飛び出して行った。

痛みなんて既にどうでも良かった、殺意がそれを上回っていたからだ。風球で舞い上がった砂煙の中から飛び出し檜山を殴ろうとする・・・しかしそれを許さないものが既に俺の背後にいた。

「止めるんだ！」

「!？」

殴ろうとした右手首を掴まれる。後ろを見れば光輝、龍太郎、雫、香織が居た。だが、そんなことは知ったことではない。右手を封じられたら左だ！と左手で殴ろうとするが・・・

「止めろつつつてんだろ！」

今度は龍太郎が抑え込む、光輝には手だけで止められたのでまだ動けたが龍太郎は全身を使って押さえ込んできたので俺は前のめりに倒れる。

「離せ！クソ、離しやがれえええ・・・!!」

抑え込まれてもなお抗うが、Lvの差は替えられない。俺よりLvが上の龍太郎の方がパワーがあるため、遂に動きが止まる。

「何があつたか知らないけどクラスメイト同士で喧嘩は駄目だろう！」

「じゃあなんでハジメだけあんなに傷だらけなんだよ!!こんなモン喧嘩ですらねえ！集団リンチだろうが!!」

「御託はいい。いくら南雲が一方的にやられているからって、同じクラスの仲間だ。二度とこういうことはするべきじゃない」

ふぎけんな！ふぎけんな！ふぎけんな！仲間だど？俺が何時からこんなヤツらの仲間になった!!と、内心で憤怒する。口では言わない、こいつには何を言っても無駄だからだ。

すると横から淡い光が溢れる白崎がハジメを治癒したのだ。その光景を見て少し安堵する、すると体中から痛みが引いてくる。白崎が此方にも回復魔法を掛けてくれたおかげだ。

「クソッ」

俺は悪態を付きながらその場を去る。誰も何も言わなかった、俺がこんな感情をあらわにする事なんて一度もなかったからである。そのまま訓練場を出る、もうあんなクスどもと一緒に訓練なんか出来るか！と思いつつ自室に戻ってベットにダイブする。

「・・・ちくしょうお」

涙が溢れて来る、友達一人できえ守れない自分に嫌気が差す。そのままの体勢で散々泣いたあと俺は深い眠りに付いた・・・

どのぐらい寝たのであろうか、もう外は既に暗くなっている。飯を食べに行こうとも思ったが、今は体がダルいので自室から動きたくない。

暫く椅子に座っているとドアをノックする音が聞こえる。ハジメが来たのかと思ったが……

「風間君起きてる？八重樫だけど開けてくれない？」

「……は？」

予想外の人物である、が余り気にする必要もないと扉を開ける、そこには、ネグリジエ姿の八重樫がいた。手には今日の夕食であっただろうパンを始めとする料理がある。

「夕食食べてないんでしょ？話ついでに持って来てあげたわよ」

これまた以外である、何故俺の為にここまでするのか分からな
いが余りに腹がなるので椅子に座って喰らい尽く。よつぽど腹が
減っていたらしくみるみる内に完食した。

「そういえば話があるって言ってたな。友達の仇すらとれない俺を
笑いにきたか？」

「そんなやつが普通夕食を持ってくる？」

「……じゃあ何しに来たってんだ？」

八重樫に問い掛ける。そもそも八重樫にはそんなことをする
義理は無いはずだ。

「南雲君から伝言よ、『ごめん、ありがとう』だって」

「……そっか」

突然のことで面食らったが笑いがこぼれる、友達にお礼を言われるなら満足だ。すると八重樫が

「それとこれは私から」

「天之河のことか？」

「察しいいわね。光輝の事だけど・・・余り恨まないであげて？あれでも本気でいってるんだから」

「わかってるけどよお・・・」

そういつて天井を仰ぎ見る

分かっているのだ。あれが本気で言ってることも、しかしあの時の自分では火に油を注ぐ行為である。

「それとね・・・」

「まだ他にあるのか？」

そう言つて目を天井から八重樫に移す、心なしか八重樫が臆病に見えるのは気のせいだろうか。

「あなたはさ、死ぬのとか怖くないの？」

「・・・いきなりだな」

いきなりの質問にどうしたものかと思つたが八重樫の表情から察するに答えるまで帰つてくれなさそうだ。

「そうだな・・・別に怖くはないな」

「・・・そう」

八重樫が顔を俯かせる。想定はしていたのだろう、とゆうかあ

の時の俺の行動を見ていたのなら大体察せるだろう。

「だが……俺には死ぬことよりも怖いものがある」
「……………え？」

八重樫が驚いたように顔を上げる、俺は構わず続ける。

「死ぬことは怖くない……でも、何も無かったことが怖いんだ。自分の存在を誰にも証明出来ずに消えてしまうのがとてつもなく耐えられない……………」

「風間君……………」

八重樫がとても寂しそうな顔になる、俺は言いたいことが言えたのか気が少し楽になる。

「ならや……………」

「ん?…」

八重樫の顔を見る、月に照らされて少し頬が紅くなっている。

「あんたのこと覚えててあげるからさ」

友達にならない？

第6話

あの後、八重樫と別れた俺は一人ベットで考えていた。

(ハジメ以外の友達、か)

笑い話とも思ったが八重樫の表情から察するに本気なのだろう。

(俺の前で八重樫があんな顔したの初めてだったなあ・・・)

今でも脳裏を通過していく八重樫の頬を染めた顔に俺は自然と顔が緩んだ、悪くないと。

それを記憶の片隅に閉まって明日のことを考えようとしたら睡魔が襲って来たので直ぐに寝てしまった。

翌日の陽が登り始めた頃、俺達は「オルクス大迷宮」のゲート前に来ていた。

「オルクス大迷宮」の中は、縦横五メートル以上ある通路は明かりもないのに薄ぼんやり発光しており、松明や明りの魔法具がなくてもある程度視認が可能だ。緑光石という特殊な鉱物が多数埋まっているらしく、「オルクス大迷宮」は、この巨大な緑光石の鉱脈を掘って出来ているらしい。

一行は隊列を組みながらゾロゾロと進む。暫く何事もなく進んでいると広間に出た。ドーム状の大きな場所で天上の高さは七、八メートル位ありそうだ。

その時、物珍しげに辺りを見渡している一行の前に、壁の隙間という隙間から灰色の毛玉が湧き出てきた。

「よし、光輝達が前に出る。他は下がれ！ 交代で前に出てもらうかな、準備しておけ！ あれはラットマンという魔物だ。すばしっこいが、たいした敵じゃない。冷静に行け！」

その言葉通り、ラットマンと呼ばれた魔物が結構な速度で飛びかかってきた。

灰色の体毛に赤黒い目が不気味に光る。ラットマンという名称に相応しく外見はねずみっぽいが……二足歩行で上半身がムキムキだった。はつきり言おう。スゲツゲエキモイデザインダナ！

前衛のチームが攻撃を開始する。間合いに入ったラットマンを光輝、雫、龍太郎の三人で迎撃する。その間に、香織と特に親しい女子二人、メガネっ娘の中村恵里とロリ元気っ子の谷口鈴が詠唱を開始。魔法を発動する準備に入る。訓練通りの堅実なフォーメーションだ。

光輝は純白に輝くバスタードソードを視認も難しい程の速度で振るって数体をまとめて葬っている。チートなステータスがあつてこそだが元々スポーツ万能なので基本の立ち回りもしっかり出来ている。

龍太郎は、天職が空手部らしく「拳士」であることから籠手と

脛当てを付けている。龍太郎はどっしりと構え、見事な拳撃と脚撃で敵を後ろに通さない。無手でありながら、その姿は盾役の重戦士のようだ。

雫は、サムライガールらしく「剣士」の天職持ちで刀とシヤムシールの中間のような剣を抜刀術の要領で抜き放ち、一瞬で敵を切り裂いていく。その動きは洗練されていて、とても綺麗である。

気がつけば、広間のラットマンは全滅していた。他の生徒の出番はなしである。どうやら、光輝達召喚組の戦力では一階層の敵は弱すぎるらしい。

「ああ、うん、よくやったぞ！ 次はお前等にもやってもらうからな、気を緩めるなよ！」

生徒の優秀さに苦笑いしながら気を抜かないよう注意するメルド団長。しかし、初めての迷宮の魔物討伐にテンションが上がるのは止められない。頬が緩む生徒達に「しようがねえな」とメルド団長は肩を竦めた。

それを見ていた俺は酷く期待外れな視線を送る、初めての魔物討伐でテンションが上がるのは認めよう。だが、力を出し過ぎである。あんな戦い方ではチート地味ているとはいえ直ぐにガタが来るはずだ。

そして、一流の冒険者か否かを分けると言われている二十階層にたどり着いた。現在の迷宮最高到達階層は六十五層らしいのだが、それは百年以上前の冒険者がなした偉業であり、今では超一流で四十層越え、二十層を越えれば十分に一流扱いだという。

「よし、お前達。ここから先は一種類の魔物だけでなく複数種類の魔物が混在したり連携を組んで襲ってくる。今までが楽勝だったからと言ってくれぐれも油断するなよ！ 今日はこの二十層で訓練して終了だ！ 気合入れろ！」

ここまで、俺とハジメは特に何もしていない。一応、騎士団員が相手をして弱った魔物を相手に訓練したり、おこぼれを二人で協力して倒しただけである

騎士団員が弱った魔物を俺とハジメの方へ弾き飛ばしてきただので、溜息を吐きながら接近し、ハジメは手を突いて地面を錬成。万一にも動けないようにして、魔物の腹部めがけて剣を突き出し串刺しにした。そして俺の戦い方と言うと・・・

「・・・せいっー!」

魔物の頭上に冷蔵庫を落とす。そして怯んだ魔物を仕留める、ライキの生成(機械)魔法はその名の通り機械を生成できるのである。しかし、ある程度イメージが固まらないと機械的な何かが出来てしまうので常にイメージは固めて置く必要がある。実際この技を使ってクラスメイト全員が驚いている、俺もビツクリだ。

そして二十層の最奥でメルド団長が声を上げる

「擬態しているぞ! 周りをよく注意しておけ!」

そして前衛が戦闘態勢に入る、どうやら擬態した魔物が出てきたらしい。ロックマウントと呼ばれる魔物を前衛パーティが倒す遠目で見えていたが光輝がオーバーキルし過ぎたらしくメルド団長に拳骨を喰らっていた。

「…………あれ、何かな? キラキラしてる…………」

ふと眩かれたその言葉に、全員が香織の指差す方へ目を向けた。そこには青白く発光する鉱物が咲くように壁から生えていた。

まるでインディコライトが内包された水晶のようである。香織を含め女子達は夢見るように、その美しい姿にうっとりした表情になった。

「ほお、あれはグランツ鉱石だな。大きさも中々だ。珍しい」

グランツ鉱石とは、言わば宝石の原石みたいなものだ。特に何か効能があるわけではないが、その涼やかで煌びやかな輝きが貴族のご婦人ご令嬢方に大人気であり、加工して指輪・イヤリング・ペンダントなどにして贈ると大変喜ばれるらしい。求婚の際に選ばれる宝石としてもトップ三に入るとか。

「素敵……」

確かに綺麗だが俺の直感はその危険と判断していた。何故なら普通珍しい鉱石なら人の手の届かない所にあるはずだ。なのにあの鉱石は取ってくださいと言わんばかりに壁からむき出している。「だったら俺らで回収しようぜ！」

そう言つて唐突に動き出したのは檜山だった。グランツ鉱石に向けてヒョイヒョイと崩れた壁を登っていく。それに慌てたのはメルド団長だ。

「こら！ 勝手なことをするな！ 安全確認もまだなんだぞ！」

しかし、檜山は聞こえないふりをして、とうとう鉱石の場所に辿り着いてしまった。

メルド団長は、止めようと檜山を追いかける。同時に騎士団員の一人がフェアスコープで鉱石の辺りを確認する。どうやら俺の直感は当たっていたらしく……

「団長！ トラップです！」

「ッ!？」

案の定トラップが作動した。

檜山がグランツ鉱石に触れた瞬間、鉱石を中心に魔法陣が広がる。魔法陣は瞬く間に部屋全体に広がり、輝きを増していった。まるで、召喚されたあの日の再現だ。

「くっ、撤退だ！ 早くこの部屋から出る！」

メルド団長の言葉に生徒達が急いで部屋の外に向かうが……間に合わなかった。

部屋の中に光が満ち、ライキ達の視界を白一色に染めると同時に一瞬の浮遊感に包まれる。

ライキ達は空気が変わったのを感じた。次いで、ドスンという音と共に地面に叩きつけられた。

尻の痛みに呻き声を上げながら、俺は周囲を見渡す。クラスメイトのほとんどは俺やハジメと同じように尻餅をついていたが、メルド団長や騎士団員達、光輝達など一部の前衛職の生徒は既に立ち上がって周囲の警戒をしている。

どうやら、先の魔法陣は転移させるものだったらしい。現代の魔法使いには不可能な事を平然とやってのけるのだから神代の魔法は規格外だ。

俺達が転移した場所は、巨大な石造りの橋の上だった。ざっと百メートルはありそうだ。天井も高く二十メートルはあるだろう。橋の下は川などなく、全く何も見えない深淵の如き闇が広がっていた。まさに落ちれば奈落の底といった様子だ。

橋の横幅は十メートルくらいありそうだが、手すりどころか縁石すらなく、足を滑らせれば掴むものもなく真つ逆さまだ。ハジメ達はその巨大な橋の中間にいた。橋の両サイドにはそれぞれ、奥へと続く通路と上階への階段が見える。

それを確認したメルド団長が、険しい表情をしながら指示を飛ばした。

「お前達、直ぐに立ち上がって、あの階段の場所まで行け。急げ！」
雷の如く轟いた号令に、わたわたと動き出す生徒達。

しかし、迷宮のトラップがこの程度で済むわけもなく、撤退は叶わなかった。階段側の橋の入口に現れた魔法陣から大量の魔物が出現しからだ。更に、通路側にも魔法陣は出現し、そちらからは一体の巨大な魔物が……

その時、現れた巨大な魔物を呆然と見つめるメルド団長の呻く様な眩きがやけに明瞭に響いた。

……ベヒモス……なのか……

まさか

第7話

橋の両サイドに現れた赤黒い光を放つ魔法陣。通路側の魔法陣は十メートル近くあり、階段側の魔法陣は一メートル位の大きさだが、その数がおびただしい。

小さな無数の魔法陣からは、骨格だけの体に剣を携えた魔物「トラウムソルジャー」が溢れる様に出現した。空洞の眼窩からは魔法陣と同じ赤黒い光が煌々と輝き目玉の様にギョロギョロと辺りを見回している。その数は、既に百体近くに上っており、尚、増え続けているようだ。

メルド団長が呟いた「ベヒモス」という魔物は、大きく息を吸うと凄まじい咆哮を上げた。

「ゴアアアアアアアアアア!!」
「ッ!？」

その咆哮で正気に戻ったのか、メルド団長が矢継ぎ早に指示を飛ばす。

「アラン！ 生徒達を率いて「トラウムソルジャー」を突破しろ！
カイル、イヴァン、ベイル！ 全力で障壁を張れ！ ヤツを食い止めるぞ！ 光輝、お前達は早く階段へ向かえ！」

「待って下さい、メルドさん！ 俺達もやります！ あの恐竜みたいなヤツが一番ヤバイでしょう！ 俺達も……」

「馬鹿野郎！ あれが本当にベヒモスなら、今のお前達では無理だ！ ヤツは六十五層の魔物。かつて、「最強」と言わしめた冒険者をして歯が立たなかった化け物だ！ さっさと行け！ 私はお前達を死なせるわけにはいかないんだ！」

メルド団長の表情に一瞬怯むも、「見捨ててなど行けない！」と踏み

止まる光輝。何とか撤退させようと再度、メルドが光輝に話そうとした瞬間、ベヒモスが咆哮を上げながら突進してきた。このままでは、クラスメイト達を全員轢殺してしまうだろう。

「『全ての敵意と悪意を拒絶する、神の子らに絶対の守りを、ここは聖域なりて、神敵を通さず、』『聖絶』!!」

そうはさせまいと二メートル四方の最高級の紙に描かれた魔法陣と四節からなる詠唱、さらに三人同時発動。一回こっきり一分だけの防御であるが、何物にも破らせない絶対の守りが顕現する。純白に輝く半球状の障壁がベヒモスの突進を防ぐ。

衝突の瞬間、凄まじい衝撃波が発生し、ベヒモスの足元が粉碎される。橋全体が石造りにも関わらず大きく揺れた。撤退中の生徒達から悲鳴が上がり、転倒する者が相次ぐ。

トラウムソルジャーは三十八層に現れる魔物だ。今までとは一線を画す戦闘能力を持っている。前方に立ちはだかる不気味な骸骨の魔物に、生徒達は半ばパニック状態だ。

隊列など無視して我先にと階段を目指してがむしやらに進んでいく。騎士団員の一人、アランが必死にパニックを抑えようとするが、目前に迫る恐怖により耳を傾ける者等いない。

その内、一人の女子生徒が後ろから突き飛ばされ転倒してしまった。「うっ」と呻きながら顔を上げると、眼前で一体のトラウムソルジャーが剣を振りかぶっていた。

「あ」
そんな一言と同時に彼女の頭部目掛けて剣が振り下ろされた。

死ぬ——女子生徒がそう感じた次の瞬間、トラウムソルジャーの頭上から電子レンジが降ってくる。後ろを振り向けば前方に手をかぎすライキと地面に両手をおくハジメの姿が見て取れる。

「ハジメ！」

「うん！」

細かいやり取りと共に突然地面が隆起し数体のトラウムソルジャーを巻き込んで橋の端へと向かって波打つように移動して行き、遂に奈落へと落とすことに成功した。

魔力回復薬を飲みながら倒れたままの女子生徒の下へ駆け寄るハジメ。錬成用の魔法陣が組み込まれた手袋越しに女子生徒の手を引っ張り立ち上がらせる。呆然としながら、為されるがままの彼女に、ハジメが笑顔で声をかけている。

「早く、前へ。大丈夫、冷静になればあんな骨どうってことないよ。うちのクラスは僕とライキを除いて全員チートなんだから！」

自信満々で背中をバシツと叩くハジメをマジマジと見る女子生徒は、次の瞬間には「うん！　ありがとう！」と元気に返事をして駆け出した。

「良くやるなあ、めっちゃビビってんのに」

「ライキもおなじでしょ？」

「・・・武者震いってやつ？」

「あんまり説得力無いねそれ・・・」

会話を交しながらも二人は内心興奮と焦りで止まらない。他のクラスメイト達も同じだ。誰も彼もがパニックになりながら滅茶苦茶に武器や魔法を振り回している。このままでは、いずれ死者が出る可能性が高い。騎士アランが必死に纏めようとしているが上手くいっていない。そうしている間にも魔法陣から続々と増援が送られてくる。

「キリがねえな・・・!!」

「何とかしないと・・・必要なのは・・・強力なリーダー・・・道を切り開

く火力……天之河くん！」

「ちよっ!? ハジメ!？」

突然走り出すハジメに慌てて俺はついて行く。ハジメが向かった先はベヒモスをギリギリ足止めしているメルド団長達である

「天之河くん!」

「なっ、南雲!？」

「南雲くん!？」

驚く一同にハジメは必死の形相でまくし立てる。

「早く撤退を！ 皆のところを！ 君がいないと！ 早く！」

「いきなり何だ？ それより、何でこんな所にいるんだ！ ここは君がいていい場所じゃない！ ここは俺達に任せて南雲は……」

「そんなこと言っている場合かっ！」

ハジメを言外に戦力外だと告げて撤退するように促そうとした光輝の言葉を遮って、ハジメは今までにない乱暴な口調で怒鳴り返した。何時も苦笑いしながら物事を流す大人しいイメージとのギャップに思わず硬直する光輝。当然だ、俺も凄く驚いている。

「あれが見えないの!? みんなパニックになってる！ リーダーがいないからだ！」

光輝の胸ぐらを掴みながら指を差すハジメ。

その方向にはトラウムソルジャーに囲まれるクラスメイト達がいいた。訓練の事など頭から抜け落ちたように誰も彼もが好き勝手に戦っている。効率的に倒せていないから敵の増援により未だ突破できないでいた。スペックの高さが命を守っているが、それも時間の問題だろう。

「一撃で切り抜ける力が必要なんだ！それが出来るのはリーダーの天之河くんだけでしょ！ 後ろもちゃんと見て！」

ハジメの鬼気迫る剣幕に光輝が首を縦にブンブン振る。その姿に

俺は内心爆笑したが、それと同時に心の中でハジメに賞賛を送るやほりお前は凄いな奴だと。

「ああ、わかった。直ぐに行く！ メルド団長！ すいませ——」
「下がれえー！」

「すいません、先に撤退します」そう言おうとしてメルド団長を振り返った瞬間、その団長の悲鳴と同時に、遂に障壁が砕け散った。

暴風のように荒れ狂う衝撃波がハジメ達を襲う。咄嗟に、俺とハジメが前に出て、ハジメは錬成により石壁を作り、俺はその前に機械的な巨大な何かを落とす。多少は威力を殺せたようだ。

そこには、蹲る団長と騎士が三人。衝撃波の影響で身動きが取れないようだ。光輝達も倒れていたがすぐに起き上がる。俺とハジメの守りが功を奏したようだ。しかしベヒモスだって黙ってはいないまま直ぐに攻撃してくるはずだ。

しかし俺とハジメには一つの策があった。しかしベヒモスの兜がまた赤熱化している、時間が無い。起き上がったメルド団長に策を伝える。

「・・・やれるんだな？」

「はい（おう）」

メルド団長は少しの笑みを見せた後ベヒモスの前に出た。そして、簡易の魔法を放ち挑発する。ベヒモスは、先ほど光輝を狙ったように自分に歯向かう者を標的にする習性があるようだ。しっかりとその視線がメルド団長に向いている。

そして、赤熱化を果たした兜を掲げ、突撃、跳躍する。メルド団長は、ギリギリまで引き付けるつもりなのか目を見開いて構えている。そして、小さく詠唱をした。

「吹き散らせ『風壁』」

詠唱と共にバックスステップで離脱する。

その直後、ベヒモスの頭部が一瞬前までメルド団長がいた場所に着弾した。発生した衝撃波や石礫は『風壁』でどうにか逸らす。大雑把な攻撃なので避けるだけならなんとかなる。

再び、頭部をめり込ませるベヒモスに、ハジメが飛びついた。赤熱化の影響が残っておりハジメの肌を焼く。しかし、そんな痛みは無視してハジメも詠唱した。名称だけの詠唱。最も簡易で、唯一の魔法。

「『錬成』！」

石中に埋まっていた頭部を抜こうとしたベヒモスの動きが止まる。周囲の石を砕いて頭部を抜こうとしても、ハジメが錬成して直してしまふからだ。そして……

「ライキイ!!」

「ああ、行くぞ!!」

ハジメが叫びに俺が呼応する。そしてベヒモスのかなり上、天上に近い位置に機械を生成する。生成するのは自分が考える中でもかなりの重さを持った機械……

その機械の名は

「ロードローラーだああああおああああ!!!」

生成されたロードローラーが自由落下運動が加わった重さと共にベヒモスの頭上に直撃する。死にはしないが相手の頭にかんりのダ

メージを与えた筈だ。ベヒモスは頭部を地面に埋めたままもがいている。中々に拍子抜けな格好だ。チラリと後ろを見るとどうやら全員撤退できたようである。隊列を組んで詠唱の準備に入っているのがわかる。

「ハジメ！俺達も撤退するぞ！」

「う、うん！」

俺とハジメが逃げ出した五秒後、地面が破裂するように粉碎されベヒモスが咆哮と共に起き上がる。その眼に、憤怒の色が宿っていると感じるの勘違いではないだろう。鋭い眼光が己に無様を晒させた怨敵を探し……俺を捉えた。再度、怒りの咆哮を上げるベヒモス。俺とハジメを追いかけようと四肢に力を溜めた。

だが、次の瞬間、あらゆる属性の攻撃魔法が殺到した。

色とりどりの魔法がベヒモスを打ち据える。ダメージはやはり無いようだが、しつかりと足止めになっている。

転ばないように注意しながら、頭を下げて全力で走る。すぐ頭上を致死性の魔法が次々と通っていく感覚は正直生きた心地がしないが、チート集団がそんなミスをするはずないと信じて駆ける。ベヒモスとの距離は既に三十メートルは広がった。しかし……

「がっ!?!」

「なにっ!?!」

突如無数に飛び交う魔法の中で、一つの火球がクイツと軌道を僅かに曲げたのだ。……ハジメの方に向かって。明らかにハジメを狙い誘導されたものだ。

(誰がやりやがった!?!いやそれよりも!)

その手は空をきり二人は奈落の底へと落ちていった

第8話

「う……あ……？」

ザアーと水の流れる音がする。冷たい微風が頬を撫で、冷え切った体が身震いした。頬に当たる硬い感触と下半身の刺すような冷たい感触に呻き声を上げて俺は目を覚ました。

ボーとする頭、ズキズキと痛む全身に眉根を寄せながら両腕に力を入れて上体を起こす。

「此処は……落ちてきたのか……」

遙か上のの崖の壁に穴があいており、そこから鉄砲水の如く水が噴き出していたのだ。ちよつとした滝である。そのような滝が無数にあり、俺は何度もその滝に吹き飛ばされながら次第に壁際に押しやられ、最終的に壁からせり出ていた横穴からウォータースライダーの如く流されたのである。とてつもない奇跡だ。

（確か……ハジメを助ける為に……ハジメ？）

すかさず周りを見渡す、そうだハジメが居ない。あの橋から落ちたあととはぐれてしまったのだ。

「クソツ何処だ!？」

辺りを見渡すが薄暗い迷宮では探すのは困難だ。かと言って、

光を使つてしまえば魔物自分のに位置を知らせてしまう

事になる。

不意に視界に動く影があった、慌てて身を隠し影の正体を見る。そこには白い毛玉がピョンピョンと跳ねているのがわかった。長い耳もある。見た目はウサギだった。但し、大きさが中型犬くらいあり、後ろ足がやたらと大きく発達している。そして何より赤黒い線がまるで血管のように幾本も体を走り、ドクンドクンと心臓のように脈打っていた。物凄く不気味である。ウサギは此方に視線を向けて・・・

目が合ってしまった

(ヤバい!?)

内心で叫んだが見つかってしまった以上どうしようもない。いつもの如く機械を生成してスキを見て倒そうと思った瞬間……

「キュウ！」

可愛らしい声を上げるが本能が告げていた、今の自分では倒せない。咄嗟にその場から右に飛ぶ。すると弾丸のように今立っていた場所をあウサギが通過する。

単純に速すぎる、今の俺ではどうしようも無かった

そこから逃げる事は簡単だった。適当な隠れるスペースがあるので腰を降ろして休む。上手く撒けたらしく、もうあのウサギは居ない。しかしある事に気づく

「寒いな・・・」

川に浸って気絶していたのと逃げるのに体力を使ったため、かなり寒い。しかしながら対策はある、生成魔法である機械を作り出す。そう、電気ストーブだ。無論電気が無いと意味を為さないがそれも対策済みだ、小型の発電機を生成する。キャンプとかでよく使われるやつだ。

「あぁ〜暖まる〜」

しかし、長く留まってはいけない。発電機の駆動音で魔物が寄ってくるからだ。服が乾いたら直ぐにでも此処を離れなければいけない。

「グルアアアアアアアアアアアア!!!」
「!!」

やはりだった、発電機の駆動音で魔物が酔ってきたのだ、慌ててそこから離れる。後方では機械の壊れる音が聞こえる。魔物が壊したのだ

気がつけばさつき目覚めた川の近くまで来ていた。
しかし……

「キュル?」
「なっ!？」

あの弾丸ウサギがまだいたのだ、とつくに何処かに行ったものと思っていたが盲点だった。川の水を飲んでいたので。しかしそこにもう二つの脅威が迫っていた。

「グルウウウウウウ……」
「!!」

振り返れば、自分が逃げて来た道に白い狼が居た。その体躯は大型犬くらいの大きさで尻尾が二本あり、ウサギと同じように赤黒い線が体に走って脈打っている。しかも一体ではなく二体だ。

前門のウサギ、後門の二尾狼二体。絶対絶命、最早助かる術はない……なのに

(この感覚は何だ?)

胸の奥が熱い。まだ本能が生きようとしているのか? 違う。ハジメを奈落へ突き落とした奴を・・・クラスメイト達に復讐したいのか?

いいや違う! 違う!! 違う!!! 生きることにも復讐も俺にとってはただの通過点に過ぎない。では何だ? この気持ちは何だ?

(あ……)

そうだ、似ている。この気持ちはハジメと初めて遊んだ時の気持ちに似ていた。あの時は本当にただただ嬉しかった。

(そうか……)

「あはは……」

思い浮かべていた、元の世界の光景を、部屋に飾ってあるガン
ブラ、親の笑顔、俺とハジメで撮った写真。何でもない俺の部屋。ど
れも大切な思い出・・・

だから絶対に帰ってやる。あのクソ共を、俺とハジメを虐げたクソ
共を殺して帰ってやる、絶対に・・・だから・・・

S
y
s
t
e
m
|
v
e
i
g
a
n

S
y
s
t
e
m
|
■
■
■
■
■



帰
ろ
う
、
エ
デ
ン
に

開放します

自分を中心に突風が巻き起こる、二尾狼（二匹）とウサギモドキが足を止めて驚く。そんな三体を置去りにして今度は淡い赤色の光が輝く、そしてそれが晴れた頃には・・・

そこにはOV

V | f ガフランが居た

第9話

(何が起きやがった・・・?)

いきなり頭に機械的な声が響いたと思ったら突風と淡い赤色の光が巻き起こり、それが晴れたと思ったら目の前にモニターのようなものが見える。不意に自分の手を見ると

「・・・What?」

英語が飛び出るほど驚いた、紫色の機械的な爪に手の平の中心には穴が空いている、理解が追いつかないが俺は今どうやら何かを纏っているらしい。

しかし俺がまだ理解もしていないのに時間は待ってくれないらしい。突然警告音の様なものと右を指し示す矢印が現れる。何事かと思いつつ右を見れば・・・

「キュルウ!!」

「!!」

ウサギモドキが蹴りの体勢で飛び込んで来るのが見える。し

かし警告してくれたのはいいがまだ理解が追いついておらず。避ける時間を失い、無理だと分かっているながら咄嗟にウサギモドキの弾丸の様な蹴りを………掴んだ

「……はあ?」

間抜けな声を上げる。当然だ、あの弾丸の様な蹴りを片腕で止めてしまっているからだ。再び警告音が鳴り響きモニターの様なものに矢印が表示される。今度は後ろだ

「ガアアアアアア!!」

「………」

後ろを見れば二尾狼(二体)がコチラに紅い雷を纏いながら突撃してくる。しかし大分頭が冴えて来た、俺は右手持っているウサギモドキを

「……ふん!」

「キュルウア!」

「グルウ!」

ウサギモドキを二尾狼達に投げつける。そして両手を前にかざす、俺の推測が正しければこの手からは

ドドドドドドドドドド!!!

ド

………出た。黄色い玉のようなものが手の平の穴の空いた場所から出て、見事に三体の魔物を死肉に変えてしまった。そう、ビームバルカンである

「……やっぱこの纏ってるやつって」

川に近付いて覗き込む。やはりだ、今纏っているものは

ヴェイガンの初期主力可変機体、ovvf ガフランである。

何でこんなものが此処に?とも思ったが今はそんなことはどうでもいい。大事な目的を思い出す、早くハジメを助け出さなければ。

ぐうくくく

くくくくくく

敵かと思ったが自分の腹の虫だったようだそういえば腹が減った。携帯食料などはないので三体の死肉となった魔物を見る。

「……食べるかなあ?」

三体の魔物を生成魔法で作りだした発電機と電子レンジで調理するのだった

あれから一週間が経過した。あの後からやったことといえば腹が空いたのでひたすら魔物を喰らい続けた。しかし魔物の肉はその魔物の特性まで取り込むらしく凄まじい痛みが走る、その為ウサギモドキの肉を一口食べて断念した。しかし探索を続ける内に面白い石を発見した。

その石はバスケットボール位の青白い石で常に不思議な水を生成し続けている。この水にはどうやら回復効果があるらしくこれのおかげで魔物の肉も痛みはあるが全て食べ切れるようになった。

そして今現在纏っているガフランだが幾つか分かったことがある、まずはステータスプレート見て驚いた

風間 ライキ 17歳 男 レベル：10

天職：生成（機会）魔法士

筋力：1000（機体補正+1000）
体力：2000（機体補正+1000）
耐性：1000（機体補正+1000）
敏捷：2000（機体補正+1000）
魔力：3000（System補正+1000000）
魔耐：3000（System補正+1000000）
技能：生成魔法（機械）・System■■■
System・veigan・魔力放出（砲）・魔力放出（弾）・纏
雷・胃酸強化・言語理解

これが今の俺のステータスである。正直言って魔力と魔耐についてはそつとしておこう・・・機体補正というのはガフランの様な機体を纏うことで発生するらしい。そして技能一覧にあるSystem・veiganというものが一番の謎である、ステータスプレートのSystem・veiganという文字をつつく、すると目の前にエアディスプレイが出現する。その中身はゲームでよく見るアビリティツリーの様なものが描かれており、初めはガフランから始まっており、今では、ヴェイガンの第一世代のMSは全て開放されている（出現条件はレベル制らしい）

あれから50層近く潜りハジメの行方を追っているが全然見つかる気配がない。モニターで熱源感知も行っているが感知されるのはどれも人の形を成していなかった。どんどん下の階層へと降りていくがここまでであった収穫といえばLvが上がったくらいだ。

「まだ下の層にいるのか・・・？」

もうこの階もあらかた調べ尽くしたが人が居たような気配は無かった。これから更に下の層に行こうと思う。

「・・・随分と下まで来たな・・・」

早速探索を開始するそしてある程度開けた場所に出たのだがそこは異様な雰囲気にもまれていた。

「んだ、こりゃ・・・」

高さ三メートルの装飾された荘厳な両開きの扉開いた状態であり、その扉の前では二体の巨人であつたであろうものが

頭を撃ち抜かれて倒れていた。その異様さに目を疑いつつ扉をくぐる。

暗視スコープを使い調べる。中は、聖教教会の大神殿で見た大理石のように艶やかな石造りで出来ており、幾本もの太い柱が規則正しく奥へ向かつて二列に並んでいた。そして部屋の中央付近に巨大な立方体の石が置かれており、部屋に差し込んだ光に反射して、つるりとした光沢を放っている。

「ん？？」

妙な違和感を覚えて巨大な立方体の石を調べる。穴だ、穴が開いているまるで人が引き剥がされたような・・・まさかこれは

ビーー！ビーー！ビーー！

「!!」

突如警告音が鳴り響く、その場からバックステップして下がる。上から何か飛来する、どうやら変なものを目覚めさせたらしい。

その魔物は体長五メートル程、四本の長い腕に巨大なハサミを持ち、八本の足をわしゃわしゃと動かしている。そして二本の尻尾の先端には鋭い針がついていた。一番分かりやすい喩えをするならサソリだろう。二本の尻尾は毒持ちと考えた方が賢明だ。明らかに今までの魔物とは一線を画した強者の気配を感じる。

「へえ？丁度いい」

しかし俺は、怯えてなど居なかった。自分の力を過信しているつもりでは無い。単純に新しい機体の性能テストをしたいのだ。その機体の名を呟く

「バクト」

ガフランの時と同じように淡い赤色の光が包み込む。そして光が晴れた頃には……

o
v
v
|
a
バ
ク
ト
が
居
た

第10話

「キシヤアアアア!!!」

サソリの第一手は金切り声を上げながら俺を掴もうとしてくる。どうやら自身の爪で俺を捕まえる気らしい。

「捕まるかよー!」

右に避けて、スラスターを吹かして飛ぶ。するとサソリの二つの尻尾から紫色の毒が噴出する、明らかに何らかの毒である事は間違いない。すかさず躲すが腕に少し付いてしまう、しかし体に危険性のある毒ならば装甲を纏っているので意味は無いと腕を前に構えようとするが……

「……なるほど!」

どうやら紫色の液体は溶解液らしくジュウジュウと音を立てている。しかして俺は冷静だ、何故なら溶解液は音はたてているものの全く腕を溶かしていないからだ。

そう、バクトの機体設定にはビームを防ぐ為の電磁装甲が組み込まれている。それで溶解液も防いだのだ。

まあ、時間が経てば少しづつ溶けるだろうが生憎そんなに付き合う気は無い。魔力を変換して作ったビームサーベルで即座に溶解液を蒸発させる。

サソリが「なにそれー!?!」という風に見ているが構わずビームバルカンで攻撃を開始する。ビームバルカンはサソリの体を直撃す

るが・・・

「キシャアアアア!!」

「硬えなおい・・・」

サソリの纏う甲赫が硬いのだ、ビームバルカンでは歯が立たない。しかし生憎とそれ以外にも武器はある。だがサソリの方が速かった

「キシャアアアア!!」

尻尾の先端が一瞬肥大化したかと思うと凄まじい速度で針が撃ち出された。避けようとするが、針が途中で破裂し散弾のように広範囲を襲う。

「ちいー」

避け切るのは不可能と悟りビームバルカンで応戦する。大半は落としたが何本かが胸部へと吸い込まれて行く、しかし武器はまだある。

胸部に開いている星型の穴からビーム（魔力）が発生する。本来は体当たり用に設計されたビームスパイクというものだが防御用に使用するとは思わなかった。

「キシャアアアア!!」

絶叫を上げながらサソリはその八本の足を猛然と動かし、突進した。四本の大きな爪を伸長し大砲のように風を唸らせながら迫る。

一本目を体を斜めに逸らしてかわし、二本目を蹴りで封じる。三本

目をビームサーベルで切りつけ、四本目のハサミを前進しすれ違いざまに切りつける。

「キシャアアアア!?」

相当痛かったらしくサソリが悲鳴を上げる。だがもう遅い、隙ができた。スラスターを吹かしてサソリに接近する。それに気づいたサソリが尻尾で応戦するしようとするが・・・

「遅いぞ」

既に手に持っていたビームライフル(尾)を薙ぐようにして放つ。変換された魔力の奔流が並んでいた二つの尻尾の先端部分を穿つ。これで毒針と針は無力化された。

それでも諦めないサソリはハサミ二つで応戦するが・・・残りの腕もサーベルで切り裂かれる。しかしそれでもサソリは死なない。ではどうするか？

「よつと」

「!？」

俺は倒れ伏す形でサソリの背中に飛び乗る。既に攻撃手段を失ったサソリはがむしゃらに暴れ回る。

「味わうんだなあ!!」

そう言ってビームスパイクを発動させる。如何に硬い甲赫でも零距离で攻撃すればいい。ビームスパイクで刺された部分は甲赫

を溶かして貫通する。更に、追い討ちを掛けるようにして両手から出したビームサーベルも突き立てる。

「キシャアアアアア……!!」

声にならない声を上げながら暴れ回るサソリ。だが背中の上で何回もビームサーベルを突き刺されては生きては居られまい。止めにビームライフル（尾）でサソリを焼き溶かした。

「……終わったか」

呆気ないと鼻で笑い再び巨大な立方体で出来た石を見る。やはり何か引き剥がされたあとのようだ、しかし疑問が一つでる。どうやって取り出した？力任せならこんな綺麗な筈がない。かと言って元々緩かったとかではないだろう、だってこんな奈落の底に封印するのならかなり嚴重にしないといけないだろう

「此処でいったいなにが……」

ここで思いつく、こんなにも綺麗に取り出せるのはきつと練成師ぐらいだと。そう、練成師だ。つまり……

な・・・」

「ハジメ・・・生きてるんだ

俺はその事実を噛み締め、更に下層へ潜って行った。

第11話

あの後、ハジメの手掛かりを見つけてからというもの、俺は足早に、しかし冷静に各階層を入念に調べていた。階層など、とうに数えるのを止めている。今の俺のステータスはこうだ

風間 ライキ 17歳 男 レベル：78

天職：生成（機械）魔法士

筋力：1980（機体補正+1000）

体力：2090（機体補正+1000）

耐性：2070（機体補正+1000）

敏捷：2450（機体補正+1000）

魔力：1780（System補正+100000）

魔耐：1780（System補正+100000）

技能：System | veigan · System | ■ ■ · 胃酸
強化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」「+豪脚」・魔力放出（砲）・魔力放出（弾）・魔力放出（剣）・魔力放出（燃料）・魔力変換（光熱）・暗視スコープ・遠見・気配感知・攻撃先読み・サーモグラフィー・見えざる傘・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・超装甲・殺気・念話・言語理解

ざつとこんな感じである、魔物をたらふく喰ったお陰か、Systemの賜物なのかは分からないがかなりの技能が増えた。しかし、まだ明らかになっていないものがある。

「まじっのSystem・・・」

そう、もう一つのSystem—■■■が開放されていないのである。元々System—veiganも開放条件がイマイチ分かっていないので余り期待はしていないが……

そうこうしている内に新しい階層に辿り着く、新しい階層に着いてからいきなり不意打ちが何度かあるので気を引き締める。

その階層は、無数の強大な柱に支えられた広大な空間だった。柱の一本一本が直径五メートルはあり、一つ一つに螺旋模様と木の蔓が巻きついたような彫刻が彫られている。柱の並びは規則正しく一定間隔で並んでいる。天井までは三十メートルはありそうだ。地面も荒れたところはなく平らで綺麗なものである。どこか荘厳さを感じさせる空間だった。

暫く進むと巨大な扉があつたのだが……開いていた。

「こいつぁ……」

その先の光景はとてつもなく異様だった。体長三十メートルを優に超える、六つの頭と長い首、鋭い牙と赤黒い眼の化け物。例えるなら、神話の怪物ヒュドラだった。

「ニコニコルウアアアン!!」

不思議な音色の絶叫をあげながら六対の眼光が身の程知らずな侵入者に裁きを与えようというのか、常人ならそれだけで心臓を止めてしまうかもしれない壮絶な殺気が叩きつけられている。しかし……

ピ！ピピピ！ピピピ！

ピピ

(あれ以外に生命反応が二つ・・・!?)

巨大な扉の影に隠れ中の様子を伺う。居た、ヒュドラの眼前で倒れ伏す片腕の無い男。そしてそれを守るように銃の様なものを携えている少女。それを視界に入れた瞬間とてつもない懐かしい感じがした。まさか・・・あの倒れ伏している白髪の青年は・・・まさか・・・

「ハジメ・・・なのか？」

声が震える、脳が震える、体全体を言い様のない感覚が駆け巡っていく。いや、人違いかもしれない、ハジメは白髪ではない。だが確かめずには要られない、漸く奈落の底で自分以外の人と出会ったのだ。するとヒュドラが男女二人を消滅させようとブレスを吐こうとしている。

「ちいっ!!」

機体をガフランからゼダスへ変更して飛び出す。そして二人の前に割って入り・・・ブレスをビームサーベルでたたっ切った。

「!？」

モニターで後ろを確認すればすつごく驚いてる少女が居る。無理もないかと思いつつも確認をする

「生きてるか？」

「!!?」

物凄く驚く少女、そりや変な奴に安否確認されてるんだから頭の中はてんやわんやだろう。

「……だ、誰?」

少女が遅れて返答をする。このまま自己紹介に突入したいがヒュドラだつて待つてはくれない、再びブレス吐く。それを察知した俺は少女と白髪の倒れ伏す青年をそれぞれ傍らに抱きかかえてスラストアーを吹かして後退する。

「……!?!」

「あぶねー……」

最早驚き続けている少女と青年を扉の影に降ろす。ここからは俺一人であるヒュドラと闘はなければならない……が

「……」

「……」

先程助けた少女が無言で此方に銃の様なものを構える。先に自己紹介を済ませる必要があるそうさ。

「……貴方誰?、何で助けたの?」

少女が問いかける、後ろの青年を庇う様にして。だが生憎とそんな時間はないのでずっと聞きたかった事を質問する。

「……質問を質問で返すようで悪いが……聞かせる……その男は南雲ハジメか？」

「!!、何でハジメの名前を!?!」

少女が青年の名前を当てられて銃身に更に力を込める、だが俺はそんな状況で酷く安堵していた。

だって奈落に落ちてからずっと探し求めた友達が目の前に居ただけだから。

(ああ………本当に)

生きてて良かった、また友達の間を見れるなんて俺の人生は早々捨てたもんじゃ無いらしい。

しかしそんな時間とも少しの間おさらばだ、まずはあのヒュドラを倒さなければ。

「………まって!!」

ドパン!!

思わず銃を発砲する少女、俺はそれをビームサーベルで一瞬に蒸発させる光熱の魔力は弾丸でさえも溶かせるようだ。

「悪いがああ敵を横取りしに行く……お前はそいつを守っていてくれ、俺にとっての大切を」

「……え?」

キョトンとする少女を尻目に俺はヒュドラの待ち構える広場へと突撃する。どうやらかなりご立腹のようだ、いきなりブレスをぶちかます。

「喰らえ・・・!!」

一つの顔にビームキャノンをぶちかます。しかし・・・足りない、くらつてはいるが精々表面を溶かした程度だ。アレを倒すには一撃で貫通する突破力が必要だ。

(懐には潜り込めそうにねえ・・・！)

六つの顔から放たれるブレスを避けて懐に潜り込むには流石に無茶と言うものだ。このままじゃハジメを助けられない・・・

いや、それだけは嫌だ、天地がひっくり返っても嫌だ、誰か何を言おうとも嫌だ!!!

俺は助けたい！ハジメを助けたい!!俺を友達と慕ってくれた人を助けたい!!!絶対に助ける!!!

開放します。

S
y
s
t
e
m
|
A
G
E

S
y
s
t
e
m
|
■
■
■

←

第12話

あの時と同じだったと思う、同じ……だけどこよつと違う感覚が身体を巡っていく。

S y s t e m | v e i g a nの時とは違い、淡く青白い光が輝く。

「ククククルアアアアアアアア!!!」

しかしそんな猶予を待つ訳もなくヒュドラがブレスを青白い光目掛けて放つ。光がブレスに着弾する……が

「氣い取られすぎたな!」
「!!!?」
「!!!」

ブレスが光を貫通する、が手応えが無い。ヒュドラが声のした方に手を上げるとそこには・・・

先程の黒をベースとした姿は存在せず、代りに白と青をベースとし、胸には「A」というマークが着いている。

それはかつて救世主と呼ばれ、戦場で力を振るい続けた一つの機体・・・

ガンダムAGE1である

その名を AGE—1

(おいおいマジかよ……)

驚くことには慣れたと思ったがまだ慣れていなかったらしい。だって今自分が纏っているものが夢にまで見たガンダムだなんて……

「クオオオオオオオ!!!」

「ちいっ!!」

余韻に浸らせてくれる筈もなくヒュドラが攻撃を再開する。様々なブレスを掻い潜ってドツズライフルを構える、だが六つのブレスを避けるだけで狙いが定まらない。少しでも注意を反らせれば撃てるとゆうのに!

「だったらあ!!」

腰からビームサーベルを引き抜き抜きブーメランのように敵に投げつける。当然ヒュドラはビームサーベルを破壊しようとし気を取られる、その間にヒュドラ顔に標準を合わせる事など造作もないことだった。

ト』をお見舞いしてやった。

ハジメ&ユエ said

「ぐ……あ……あ……？」

目を覚ます、どうやら気絶してしまっていたらしい。冷静に状況を判断する。

(どうなった……？確かヒュドラの攻撃からユエを守って……ヒュドラ？)

自分が置かれた現状に悪寒が走る。不味い、早く態勢を立て直さなければ！

(……ん？)

そういえば、気絶している間によく攻撃が来なかったなと思ひ辺りを見回すと……

「……ユエ？」

扉の陰からユエが部屋の中を見ている。扉ということとは此処はヒュドラの部屋の前か……ユエが運んできてくれたのか？と思っている信じられないものを見ているかのような視線を扉の向こうにやっていたユエが此方に気づく。

「ハジメー！」

ユエが部屋の中から目を離し此方に寄ってくる。共に生存

を確認しつつ状況を確かめる。自分が気絶している間に何があったのかを

「ありがとな、ユエがここまで運んできてくれたのか？」

「……違う」

「……じゃあ何処のお人好しが俺達を助けたってんだ？」

「……ん、あれ」

ユエが部屋の中を指さす、ハジメも身を乗り出して確認して……

「なんでやねん」

ツツコミが繰り出される。だってそうだろう、ヒュドラを相手していたのは……

『機動戦士ガンダムAGE』に登場するガンダムAGE1だったのだから。

ライキ said

(終わったか……)

ヒュドラの六つの首を落としビームサーベルで体をグチャグチャに切り裂いて二度と立ち上がれない様にしたライキは入り口に向かつて歩き出す。正直言って未だに混乱しているが今はハジメの安否が最優先だ。

扉の方を見ると既に目が覚めていたらしく、ハジメと少女が此

方に歩いてきた。

「……………」

無言で向き合う三人、そしてハジメが銃を構える。

「ユエを助けた事は感謝しておく。だが万が一とゆうこともある……お前は俺達の敵か？」

銃を構えながら呟くハジメ。敵ならば即座に殺すとゆうことた
だろう。だが初めから敵対するなど有り得ない、俺はシールドとドツ
ズライフルを地面に落とす。

「…………敵対するつもりは無い、と？」

「…………変わったな…………」

「何？」

AGE1の装甲を解除する、淡い青白い光を発して生身の姿を晒
す。ハジメとユエがその様子にぎよっとしている。だが次の瞬間ハ
ジメの顔が凍りつく。

当然といえば当然だ、自分を助けようとして自ら奈落の底へ落ちた友達が自分と同じように今日まで生きていたのだから。

「変わっちゃまったよ、俺達・・・けど、また会えて良かった・・・
ハジメ」

「ラ・・・イキ・・・？」

こうして奈落の底の底で

ハジメと
何をしてでも故郷へ帰ることを望んだ 南雲

イキは
復讐を誓いハジメと帰ることを望んだ風間 ラ

遂に再開を果たした

第13話

ハジメ s i d e

「ハジメの友達・・・？」
「ああ」

再奥のガードイアンを倒す少し前、俺とユエは話しをしていた。ライキの話しだ、今でも奈落に落ちた自分を助けようとして躊躇なく奈落まで俺を追ってくる姿を鮮明に覚えていた。

だからこそ未だに生きているとは知らない友に少し引け目を感じていた、自分を助ける為だけに奈落に落ちたことに後悔は無いのか、自分を恨んでいないか、まだ友達でいてくれるか、などと頭の中を友に対する不安が駆け巡っていた。

「・・・多分、大丈夫」
「ユエ・・・？」

手を握ってくるユエの顔を見る、ユエが優しく語り掛けてくる。

「その人、多分ハジメの事凄く信頼してる・・・だから怒ったりしない・・・」

「ああ・・・そうだいいいな」

ユエが優しく宥める。そうだ、どんな敵が立ちはだかろうともことごとくを粉碎して元の世界にユエと一緒に帰ってみせると誓った。助けようとしてくれたライキの為にも絶対に帰ってやる。

そう思っ

ていた、だが・・・

「ラ・・・イ・・・キ・・・？」

「随分とカツコ良くなったじゃねえか、ハジメ」

思いもよらない場所で再開した、ライキの顔は余り変わっておらず変わったといえれば髪の毛が赤黒くなったぐらいである。

「ああ・・・本当に変わっちゃま・・・た・・・な・・・」

あ、やばいと思った瞬間には横に倒れていた。流石に体力が限界に近づいていたようだ。ああ・・・そうだ、取り敢えずライキに言いたいことがあったんだ。

「・・・ライキ・・・」
「・・・何だ」

「ごめんな・・・ありがとう」

識を手放した

そうやってハジメは意

ライキside

「・・・」

『ごめんな・・・ありがとう』

あの後俺とユエと呼ばれる少女は気絶したハジメをヒュドラが居た更に最奥にあった誰かの知らない住居にてハジメを休ませていた。今は、ユエと呼ばれる少女が付きつきりで看病してるはずだ。その間に俺はこの異様な建物の探索をしていた。

『ごめんな・・・ありがとう』

「・・・・・・・・」

ハジメの気絶寸前の言葉が脳裏を掠める、それは此方のセリフでもあるというのに。

(そいつあ俺が言いたいぜ・・・ハジメ)

脳内で呟く、実際ハジメという友達がいたからこそ俺は、俺という人格はここまで構成されたのだアイツには礼を尽くしても尽くしたりないくらいだ。

だって■■■■たあの日に助けてくれたのだから

探索もあらかた終わり(開かない部屋が大半だったが)ハジメの様子が気になりハジメとユエが居る部屋に戻る・・・までは良かったのだが・・・

「・・・・・・・・なんてことしてやがる」(呆)

そこには生まれのままの姿のユエと、現状に戸惑いを隠せず赤面しているハジメが居た。

ハジメ side

ハジメは、体全体が何か温かで柔らかな物に包まれているのを感じた。随分と懐かしい感触だ。これは、そうベッドの感触である。頭と背中を優しく受け止めるクッションと、体を包む羽毛の柔らかさを感じ、ハジメのまどろむ意識は混乱する。

(何だ？　ここは迷宮のはずじゃ……何でベッドに……)

まだ覚醒しきらない意識のまま手探りをしようとする。しかし、右手はその意思に反して動かない。というか、ベッドとは違う柔らかな感触に包まれて動かせないのだ。手の平も温かで柔らかな何かに挟まれているようだ。

(何だこれ?)

ボーとしながら、ハジメは手をムニムニと動かす。手を挟み込んで

いる弾力があるスベスベの何かはハジメの手の動きに合わせてぷにぷにとした感触を伝えてくる。何だかクセになりそうな感触について夢中で触っていると……

「……………あん……………」

(!?)

何やら艶かしい喘ぎ声が聞こえた。その瞬間、まどろんでいたハジメの意識は一気に覚醒する。

慌てて体を起こすと、ハジメは自分が本当にベッドで寝ていることに気がついた。純白のシーツに豪華な天蓋付きの高級感溢れるベッドである。場所は、吹き抜けのテラスのような場所で一段高い石畳の上にいるようだ。爽やかな風が天蓋とハジメの頬を撫でる。周りには太い柱と薄いカーテンに囲まれている。空間全体が久しく見なかった暖かな光で満たされている。

さつきまで暗い迷宮の中でライキと会ってそれから……

(ライキ!?)

再び再会した友に会おうと思い……その考えは隣から聞こえた艶かしい声に中断された。

「……………んあ……………ハジメ……………あう……………」

「!?」

ハジメは慌ててシーツを捲ると隣には一糸纏わなくユエがハジメの右手に抱きつきながら眠っていた。そして、今更ながらに気がつくがハジメ自身も素っ裸だった。

「なるほど……これが朝チユンってやつか……ってそうじゃない!」

混乱して思わず阿呆な事をいい自分でツツコミを入れるハジメ。若干、虚しくなりながらユエを起こす。

「ユエ、起きてくれ。ユエ」

「んう〜……」

声をかけるが愚図るようにイヤイヤをしながら丸くなるユエ。ついでにハジメの右手はユエの太ももに挟まれており、丸くなったことで危険な場所に接近しつつある。

「ぐっ……まさか本当にあの世……天国なのか?」

更に阿呆な事を言いながら、ハジメは何とか右手を抜こうと動かすが、その度に……

「……んう〜……んっ……」

と実に艶かしく喘ぐユエ。

「ぐう、落ち着け俺。いくら年上といえど、見た目はちみっこ。動揺するなどありえない!俺は断じてロリコンではない!」

ハジメは、表情に変態紳士か否かの瀬戸際だと戦慄の表情を浮かべながら自分に言い聞かせる。右手を引き抜くことは諦めて、ハジメは何とか呼び掛けで起こそうと声をかけるが一向に起きる気配はなかった。

カチャ

不意に扉が開く、敵か！と思ったならそこに居るのは呆れて苦笑いを零しているライキだった

「……なんてことしてやる」(呆)

そのあと幾ら起こそうとしても起きないユエを纏雷を使って強制的に目を覚まさせるハジメであった……

第14話

あの後、中々起きないユエにキレたハジメが纏雷で起こすという強硬手段により、ようやく起きるユエなのだった……

閑話休題

ある程度探索を終えた俺達は三階にある部屋の奥、魔法陣の向こう側、豪華な椅子に座った人影に目を向けていた。人影は骸だった。既に白骨化しており黒に金の刺繍が施された見事なローブを羽織っている。薄汚れた印象はなく、お化け屋敷などにあるそういうオブリエと言われれば納得してしまいそうだ。

その骸は椅子にもたれかかりながら俯いている。その姿勢のまま朽ちて白骨化したのだろう。魔法陣しかないこの部屋で骸は何を思っていたのか。寝室やりビングではなく、この場所を選んで果てた意図はなんなのか……

「怪しい……どうする?」

「俺が行こう」

ユエの問いに俺がガフランを纏いながら進み出す、何が会ってもいいように最低限の防御というものは必要だ。

「二応、フォローは頼むぞ」

「おう／＼．．．ん」

ハジメはドンナーを構え、ユエは魔法を撃てるよう態勢に入る。ライキが魔法陣の中央に足を踏み込んだ瞬間、カッと純白の光が爆ぜ部屋を真っ白に染め上げる。

まぶしさに目を閉じるライキ。直後、何かが頭の中に侵入し、まるで走馬灯のように奈落到落ちてからのことが駆け巡った。

やがて光が収まり、目を開けたライキの目の前には、黒衣の青年が立っていた。

中央に立つライキの眼前に立つ青年は、よく見れば後ろの骸と同じローブを着ていた。

「試練を乗り越えよくだどり着いた。私の名はオスカー・オルクス。この迷宮を創った者だ。反逆者と言えかわかるかな？」

話し始めた彼はオスカー・オルクスというらしい。「オルクス大迷宮」の創造者のようだ。驚きながら彼の話を聞く。

「ああ、質問は許して欲しい。これは唯の記録映像のようなものでね、生憎君の質問には答えられない。だが、この場所にたどり着いた者に世界の真実を知る者として、我々が何のために戦ったのか……メツセージを残したくてね。このような形を取らせてもらった。どうか聞いて欲しい。……我々は反逆者であって反逆者ではないということとを」

そうして始まったオスカーの話は、ハジメが聖教教会で教わった歴史やユエに聞かされた反逆者の話とは大きく異なった驚愕すべきものだった。

それは狂った神とその子孫達の戦いの物語。

神代の少し後の時代、世界は争いで満たされていた。人間と魔人、様々な亜人達が絶えず戦争を続けていた。争う理由は様々だ。領土拡大、種族的価値観、支配欲、他にも色々あるが、その一番は「神敵」だから。今よりずっと種族も国も細かく分かれていた時代、それぞ

れの種族、国がそれぞれに神を祭っていた。その神からの神託で人々は争い続けていたのだ。

だが、そんな何百年と続く争いに終止符を討たんとする者達が現れた。それが当時、「解放者」と呼ばれた集団である。

彼らには共通する繋がりがあった。それは全員が神代から続く神々の直系の子孫であったということだ。そのためか「解放者」のリーダーは、ある時偶然にも神々の真意を知ってしまった。何と神々は、人々を駒に遊戯のつもりで戦争を促していたのだ。「解放者」のリーダーは、神々が裏で人々を巧みに操り戦争へと駆り立てていることに耐えられなくなり志を同じくするものを集めたのだ。

彼等は、「神界」と呼ばれる神々がいると言われていた場所を突き止めた。「解放者」のメンバーでも先祖返りと言われる強力な力を持った七人を中心に、彼等は神々に戦いを挑んだ。

しかし、その目論見は戦う前に破綻してしまう。何と、神は人々を巧みに操り、「解放者」達を世界に破滅をもたらそうとする神敵であると認識させて人々自身に相手をさせたのである。その過程にも紆余曲折はあったのだが、結局、守るべき人々に力を振るう訳にもいかず、神の恩恵も忘れて世界を滅ぼさんと神に仇なした「反逆者」のレットルを貼られ「解放者」達は討たれていった。

最後まで残ったのは中心の七人だけだった。世界を敵に回し、彼等は、もはや自分達では神を打つことはできないと判断した。そして、バラバラに大陸の果てに迷宮を創り潜伏することにしたのだ。試練を用意し、それを突破した強者に自分達の力を譲り、いつの日か神の遊戯を終わらせる者が現れることを願って。

そして、オスカー・オルクスなる者が話しを続ける。いや、俺にとつてはここからが本番だったのかもしれない。

「最後にもう一つ話しておこう・・・我々解放者全員が一丸となって生み出した神殺しとなりうるかも知れない二つの力について」

神殺し・・・？一体どのような力なのだろうか。次の言葉こ単語を聞こうとして俺は凍りついた。

「その力の名は・・・System」

「「?」」

俺や後ろにいるハジメとユエから驚きの声が聞こえる。ハジメとユエも既に俺のステータスプレートを確認済みなので驚いている。

「この二つの力はその者が最も強いと思えるモノを極限にまで攻撃力を高めるというものだ。だが・・・この力は強すぎる故に使えるものが限定された。」

そこからの説明はこうだ。

- ①二つSystemは使い手の矛盾した感情に反応する
- ②この力はその世界に使い手がいないと判断した場合に自動的に世界を超え適合者を探し続ける。
- ③使い手によって変わるので必ずしも強いとは限らない

「この力が扱える者が現れた時にはどうかこのことを話してほしい・・・では、最後に君に私の力を授ける。どのように使うも君の自由だ。だが、願わくば悪しき心を満たすためには振るわないで欲しい。話は以上だ。聞いてくれてありがとう。君のこれからが自由な意志の下にあらんことを」

そう話を締めくくり、オスカーの記録映像はスッと消えた。同時に、ライキの脳裏に何かが侵入してくる。ズキズキと痛むが、それとある魔法を刷り込んでいたためと理解できたので大人しく耐えた。

やがて、痛みも収まり魔法陣の光も収まる。俺はガフランを解除した。

あの後（ハジメ達も覚えたが）、神代魔法というものを覚えたらしい。生成魔法と言うやつで魔法を鉱物に付加して、特殊な性質を持った鉱物を生成出来る魔法だ。俺の生成（機械）とは随分勝手が違うがまあ、そんなことはどうでもいい

「あく、取り敢えず、ここはもう俺等のもんだし、あの死体片付けるか」
ハジメに慈悲はなかった。

「ん……畑の肥料……」
ユエにも慈悲はなかった。

「ビームサーベルでぶった切った方が早くねえか？」
ライキにも慈悲は無かった。

風もないのにオスカアの骸がカタリと項垂れた。
オスカアの骸を畑の端に埋め、一応、墓石も立てた。流石に、肥料扱いは可哀想すぎる。

埋葬が終わると、ライキとハジメとユエは封印されていた場所へ向かった。次いでにオスカアが嵌めていたと思われる指輪も頂いておいた。墓荒らしとか言っただけじゃない。その指輪には十字に円が重った文様が刻まれており、それが書斎や工房にあった封印の文様と同じだったのだ。

一番の目的である地上への道を探らなければならない。ハジメとユエは書棚にかけられた封印を解き、めぼしいものを調べていく。

すると、この住居の施設設計図らしきものを発見した。通常の青写真ほどしつかりしたものではないが、どこに何を作るのか、どのような構造にするのかということがメモのように綴られたものだ。

「ビンゴ！ユエー！ライキー！あつたぞー！」

「んっ」

「本当かー！」

ハジメから歓喜の声上がる。ユエも嬉しそうだ。設計図によれば、どうやら先ほどの三階にある魔法陣がそのまま地上に施した魔法陣と繋がっているらしい。オルクスの指輪を持っていないと起動しないようだ。盗ん……貰っておいでよかつた。

更に設計図を調べていると、どうやら一定期間ごとに清掃をする自立型ゴーレムが工房の小部屋の一つにあつたり、天上の球体が太陽光と同じ性質を持ち作物の育成が可能などということもわかつた。人の気配がないのに清潔感があつたのは清掃ゴーレムのおかげだったようだ。

工房には、生前オスカーが作成したアーティファクトや素材類が保管されているらしい。これは盗ん……譲ってもらふべきだろう。道具は使つてなんぼである。

「ハジメ……ライキ……これ」

「うん？」

ハジメと俺が設計図をチェックしていると他の資料を探っていたユエが一冊の本を持ってきた。どうやらオスカーの手記のようだ。かつての仲間、特に中心の七人との何気ない日常について書いたものようである。

その内の一節に、他の六人の迷宮に関することが書かれていた。

「……つまり、あれか？ 他の迷宮も攻略すると、創設者の神代魔法が手に入るということか？」

「……だろうなあ」

手記によれば、オスカーと同様に六人の「解放者」達も迷宮の最新部で攻略者に神代魔法を教授する用意をしているようだ。生憎とどんな魔法かまでは書かれていなかったが……

「……帰る方法見つかるかも」

ユエの言う通り、その可能性は十分にあるだろう。実際、召喚魔法という世界を超える転移魔法は神代魔法なのだから。

「だな。これで今後の指針ができた。地上に出たら七大迷宮攻略を目指すぞ」

「んっ」

明確な指針ができて頬が緩むハジメ。思わずユエの頭を撫でるとユエも嬉しそうに目を細めた。

それから暫く探したが、正確な迷宮の場所を示すような資料は発見できなかった。現在、確認されている【グリュウエン大砂漠の大火山】【ハルツィナ樹海】、目星をつけられている【ライセン大峡谷】【シユネー雪原の氷雪洞窟】辺りから調べていくしかないだろう。

暫くして書斎あさりに満足した二人は、工房へと移動した。

工房には小部屋が幾つもあり、その全てをオルクスの指輪で開くことができた。中には、様々な鉱石や見たこともない作業道具、理論書などが所狭しと保管されており、錬成師にとっては楽園かと見紛うほどである。

ハジメは、それらを見ながら腕を組み少し思案する。そんなハジメの様子を見て、ユエが首を傾げながら尋ねた。

「……どうしたの？」

ハジメは暫く考え込んだ後、ユエと俺に提案した。

「うーん、ライキ、ユエ。暫くここに留まらないか？ さっさと地上に出たいのは俺も山々なんだが……せつかく学べるものも多いし、ここは拠点としては最高だ。他の迷宮攻略のことを考えても、ここで可能な限り準備しておきたい。どうだ？」

俺も早く外に出たいしユエは三百年も地下深くに封印されていた

のだから一秒でも早く外に出たいだろうと思ったのだが、ハジメの提案にキョトンとした後、直ぐに了承した。不思議に思ったハジメだが……

「……ハジメと一緒に何処でもいい」

「友達と居れるなら何処でも構わねえよ」

そういう事らしい。照れくささを誤魔化すハジメ。結局、三人はここで可能な限りの鍛錬と装備の充実を図ることになった。

~~~~~

おまけ

その日の晩、天井の太陽が月に変わり淡い光を放つ様を、ハジメとライキは風呂に浸かりながら全身を弛緩させてぼんやりと眺めていた。奈落に落ちてから、ここまで緩んだのは初めてである。風呂は心の洗濯とはよく言ったものだ。

「はふう〜、最高だあ〜」

「ああ……いい」

今の俺とハジメからは考えられないほど気の抜けた声が風呂場に響く。全身をだらんとさせたままボーとしてみると、ハジメが俺に話しかける。

「なあ……ライキ」

「ん?」

ハジメの顔から察するに余程大事な事なのだろう。俺も真剣な顔つきになる。

「お前は……クラスメイト達をどうするつもりだ?」

「殺るに決まってるだろ」

即答である、当然だ。

「全員か?」

「初めはそのつもりだったがなあ……お前を虐げたヤツ、俺が個人的にムカついたやつにだけ絞ることにするさ」

「……そっか」

恐らく確認だけだったのだろう。そのまま二人で今後のことについて話し合う……が

「んっ……気持ちいい……」

一糸まとわぬ姿でハジメのすぐ隣に腰を下ろすユエの姿があった。

「……ユエさんや、二人で入るって言ったよな？」

「……だが断る」

「ちよつと待て！ 何でそのネタ知ってる！」

「……」

「……せめて前を隠せ。タオル沢山あったろ」

「むしろ見て」

「……」

「……えい」

「……あ、当たってるんだが？」

「当たてんのよ」

「だから何でそのネタを知ってんだ！ ええい、俺は上がるからな！」

「逃がさない！」

「ちよ、まで、あつ、アツ……!!!」

「……お前らなあ」(呆)

その後、何があったのかはご想像にお任せする。

おまけ2

その頃の香織

「あれ？ 何か急に殺意が……」

「奇遇ね……私も」

二人して般若を後ろに携える香織と雫の姿があったという。



## 人物紹介

### 風間ライキ

風間 ライキ 17歳 男 レベル：???  
天職：生成（機械）魔法士  
筋力：10689（機体補正+6000）  
体力：11678（機体補正+6000）  
耐性：12689（機体補正+6000）  
敏捷：10987（機体補正+6000）  
魔力：12789（System補正+100000）  
魔耐：10963（System補正+100000）  
技能・生成魔法「+機械生成」「+鋇物付与」System|vei  
gan「+部分変化」「+機体改造」·System|AGE「+部分変化」  
「+機体改造」·胃酸強化·纏雷·天歩「+空力」「+縮地」  
「+豪脚」·魔力放出「+砲」「+弾」「+剣」·魔力変換「+光熱」  
「+燃料」  
「+体力」  
「+治療力」·高速魔力回復·スコープ「+倍率」  
「+暗視」·  
気配感知·先読み·サーモグラフィ·限界突破·見えざる傘·  
毒耐性·麻痺耐性·石化耐性·超装甲·殺気·念話·言語理解

今作におけるオリジナル主人公。ハジメを唯一無二の友達と慕っており、ハジメの幸せを願っている。その為ハジメを不幸にするものには殺意をもって殺そうとするが殆どがハジメに止められるため不発に終わっている。（ハジメに止められればどんな事があっても止める）又、ガンブラ好きで特にガンダムAGEの機体には目がない。

今はハジメと元の世界に帰ることを目標とし、クラスメイトに

復讐することを決定事項としている

### 南雲ハジメ

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：???

天職：錬成師

筋力：10950

体力：13190

耐性：10670

敏捷：13450

魔力：14780

魔耐：14780

技能：錬成「＋鉱物系鑑定」「＋精密錬成」「＋鉱物系探査」「＋鉱物分離」「＋鉱物融合」「＋複製錬成」「＋圧縮錬成」・魔力操作「＋魔力放射」「＋魔力圧縮」「＋遠隔操作」・胃酸強化・纏雷・天歩「＋空力」「＋縮地」「＋豪脚」「＋瞬光」・風爪・夜目・遠見・気配感知「＋特定感知」・魔力感知「＋特定感知」・熱源感知「＋特定感知」・気配遮断「＋幻踏」・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・恐慌耐性・全属性耐性・先読・金剛・豪腕・威圧・念話・追跡・高速魔力回復・魔力変換「＋体力」「＋治癒力」・限界突破・生成魔法・言語理解

原作の主人公。ライキを友達と慕っており、奈落に落ちた自分を躊躇なく追いかけてきてくれたライキに嬉しい反面少し申し訳ない気持ちになっている。

封印部屋から解放してくれたハジメを心から愛しており、ライキとの関係はハジメの友達ということもあり心を開いている。

シア

今作の（ライキの）ヒロイン。今後どうなってくるかはお楽しみである。

白崎 香織

原作沿い。死んだと決めつけられているハジメ（ついでにライキ）の行方を今も追っている。

八重樫 雫

原作沿い。ライキに恋している自分に気づいておらず、香織と同じく二人の行方を追っている。

## 第16話

あの後俺達はオスカーの住処を拠点にし、修行や武器の生成、レベル上げを順調に進めていった。

「……ハジメ、気持ちいい?」

「ん、気持ちいいぞ」

「ふふ……じゃあ、こつちは?」

「あ、それもいいな」

「もつと……気持ちよくしてあげる……」

現在、ユエはハジメのマッサージ中である。エロいことは今はしてない。何故、マッサージしているかというと、それはハジメの左腕が原因だ。ハジメの左腕に付けられた義手と体が馴染むように定期的にマッサージしているのである。

この義手はアーティファクトであり、魔力の直接操作で本物の腕と同じように動かすことができる。擬似的な神経機構が備わっており、魔力を通すことで触った感触もきちんと脳に伝わる様に出来ている。また、銀色の光沢を放ち黒い線が幾本も走っており、所々に魔法陣や何らかの文様が刻まれている。

実際、多数のギミックが仕込まれており、工房の宝物庫にあったオスカー作の義手にハジメのオリジナル要素を加えて作り出したものだ。生成魔法により創り出した特殊な鉱石を山ほど使っており、世に出れば間違いなく国宝級のアーティファクトとして厳重に保管されるだろう逸品である。もつとも、魔力の直接操作ができないと全く動かせないので常人には使い道がないだろうが……

「おう、飯取ってきたぞ〜」

扉が開け放たれ、ライキが魚を数匹担いで帰ってくる。

「オカエリイ♪（\*・ω・人）〜」

「何で顔文字が入っているかは置いてくとして・・・義手と魔眼石の方はどうだ？」

ハジメはヒュドラとの戦いで右目を失っている。ブレスの熱で眼球の水分が蒸発してしまい、神水を使う前に「欠損」してしまっていたので治癒しなかったのだ。それを気にしたユエが考案し、創られたのが「魔眼石」だ。

いくら生成魔法でも、流石に通常の「眼球」を創る事はできなかった。しかし、生成魔法を使い、「神結晶に」「魔力感知」「先読」を付与することで通常とは異なる特殊な視界を得ることができる魔眼を創ることに成功した。

「そつちこそちゃんと機能してるのか？」

「おう、後は俺次第だな」

あれから俺のシステムに組み込まれたのも幾つかある。修行中にわかったことなのだが、MSを動かすのは簡単な事ではないらしく、おおまかな動きは何とかなるが細かい動作はかなり負担が掛かるらしく、修行中にMSの一部分がイかれてしまったのだ。元に戻せば何とかなるがこれからの戦いの中ではかなり致命的となるだろう。特に高機動戦闘型のMSにとっては何としてでも直したい。

そこで俺とハジメである考えに至ったのだ。基本的構造は揃っているのでそれを管理、制御する為の装置を組み込めばいいのでは？と。

そこでまずはコンピューターに使われている五大装置を組み込んでみたのだ。

- ・ 入力装置：外部からコンピューターにデータを読み込ませる装置
- ・ 記憶装置：データやプログラムを記憶しておく装置
- ・ 演算装置：四則演算や論理演算を行う装置
- ・ 制御装置：記憶装置から取り出した命令を読解し実行を支持する装置
- ・ 出力装置：処理されたデータをコンピューターの外部に出す装置

と、こんな感じである。しかしここでもっと簡単な方法に行き当たる。そう、中央処理装置（CPU）とメモリである。CPUならば戦闘中も勝手に演算処理をしてくれるし楽だからである。

#### 閑話休題

それから十日後、遂に俺とハジメとユエは地上へ出る。

三階の魔法陣を起動させながら、ハジメが俺とユエに静かな声で告げる。

「ユエ、ライキ、俺の武器や俺達の力は地上では異端だ。聖教教会や各国が黙っているということはないだろう」

「ん……」

「おう」

「兵器類やアーティファクトを要求されたり、戦争参加を強制される可能性も極めて大きい」

「ん……」

「ああ」

「教会や国だけならまだしも、バックの神を自称する狂人共も敵対するかもしれない」

「ん……」

「100%ぶち当たるだろうな……」

「世界を敵にまわすかもしれないヤバイ旅だ。命がいくつあっても足りないくらいな」

「今更……」

「寧ろ望むところだよ、かかって来いってな」

「俺がユエを、ライキを、ユエが俺を、ライキを守る。それで俺達は最強だ。全部なぎ倒して、世界を越えよう」

「なら俺はお前達の道を作る。そして……奴等に思い出させてやる。お前達が捨てた者が戻ってきたとな」

「……行こう！」

「んっ！」

「おうよ!!」

## 第17話

これは、ハジメとライキが奈落に落ちてから五日たった日の物語である。

ハイリヒ王国王宮内、召喚者達に与えられた部屋の一室で、八重樫雫は、泣き崩れた表情で未だに眠る親友を見つめていた。

あの日、迷宮で死闘と喪失を味わった日から既に五日が過ぎていく。

あの後、宿場町ホルアドで一泊し、早朝には高速馬車に乗って一行は王国へと戻った。とても、迷宮内で実戦訓練を続行できる雰囲気ではなかったし、無能扱いだったとは言え勇者の同胞二人が死んだ以上、国王にも教会にも報告は必要だった。

それに、厳しくはあるが、こんな所で折れてしまっただけでは困るのだ。致命的な障害が発生する前に、勇者一行のケアが必要だという判断もあった。

雫は、王国に帰って来てからのことを思い出し、香織に早く目覚めて欲しいと思いつつも、同時に眠ったままでも良かったとも思っている。



た。

帰還を果たしライキとハジメの死亡が伝えられた時、王国側の人間は誰も彼もが愕然としたものの、それが「無能」のハジメとライキと知ると安堵の吐息を漏らしたのだ。

国王やイシュタルですら同じだった。強力な力を持った勇者一行が迷宮で死ぬこと等あつてはならないこと。迷宮から生還できない者が魔族に勝てるのかと不安が広がっては困るのだ。神の使徒たる勇者一行は無敵でなければならぬのだから。

だが、国王やイシュタルはまだ分別のある方だっただろう。中には悪し様にハジメとライキを罵る者までいたのだ。

もちろん、公の場で発言したのではなく、物陰でこそそと貴族同士の世間話という感じではあるが。やれ死んだのが無能でよかつただの、神の使徒でありながら役立たずなど死んで当然だの、それはもう好き放題に貶していた。まさに、死人に鞭打つ行為に、雫は怒りに身を任せてしまいそうになった。

実際、正義感の強い光輝が真っ先に怒らなければ貴族達を滅多切りにしても可笑しくなかつた。光輝が激しく抗議したことで国王や教会も悪い印象を持たれてはマズイと判断したのか、二人を罵った人物達は処分を受けたようだが……

逆に、光輝は無能にも心を砕く優しい勇者であると噂が広まり、結局、光輝の株が上がっただけで、ハジメとライキは勇者の手を煩わせただけの無能であるという評価は覆らなかった。

あの時、自分達を救ったのは紛れもなく、勇者も歯が立たなかった化け物をたった二人でというのに。そんなハジメを死に追いやったのはクラスメイトの誰かが放った流れ弾・・・そしてそれを助けようとしたライキだというのに。

クラスメイト達は図ったように、あの時の誤爆：の話をしなさい。自分の魔法は把握していたはずだが、あの時は無数の魔法が嵐の如く吹き荒れており、〴〵「万一分の魔法だったら」と思うと、どうしても話題に出せないのだ。それは、自分が人殺しであることを示してしまうから。

結果、現実逃避をするように、あれは二人が自分達で・・・何かしてドジったせいだと思おうようにしているようだ。死人に口なし。無闇に犯人探しをするより、ハジメとライキの自業自得にしておけば誰もが悩まなくて済む。クラスメイト達の意見は意思の疎通を図ることもなく一致していた。

メルド団長は、あの時の経緯を明らかにするため、生徒達に事情聴取をする必要があると考えていた。生徒達のように現実逃避して、単純な誤爆であるとは考え難かったこともあるし、仮に過失だったのだとしても、白黒はつきりさせた上で心理的ケアをした方が生徒達のためになると確信していたからだ。

こういうことは有耶無耶にした方が、後で問題になるものなのである。なにより、メルド自身、はつきりさせたかった。『助ける』と言っておいて、二人を救えなかったことに心を痛めているのはメルド団長も同様だったからだ。

しかし、メルド団長は行動すること叶わなかった。イシユタルが、生徒達への詮索を禁止したからだ。メルド団長は食い下がったが、国王にまで禁じられては堪えるしかなかった。

「あなたが知ったら……怒るのでしょうか？」

あの日から一度も目を覚ましていない香織の手を取り、そう呟く雫。

医者 of 診断では、体に異常はなく、おそらく精神的ショックから心を守るため防衛措置として深い眠りについているのだろうということだった。故に、時が経てば自然と目を覚ますと。

雫は香織の手を握りながら、「どうかこれ以上、私の優しい親友を傷つけないで下さい」と、誰ともなしに祈った。

その時、不意に、握り締めた香織の手がピクツと動いた。

「!? 香織! 聞こえる!? 香織!」

雫が必死に呼びかける。すると、閉じられた香織の目蓋がふるふると震え始めた。雫は更に呼びかけた。その声に反応してか香織の手がギョツと雫の手を握り返す。

そして、香織はゆっくりと目を覚ました。

「香織！」

「……雫ちゃん？」

ベッドに身を乗り出し、目の端に涙を浮かべながら香織を見下ろす雫。香織は、しばらくボーと焦点の合わない瞳で周囲を見渡していたのだが、やがて頭が活動を始めたのか見下ろす雫に焦点を合わせ、名前を呼んだ。

「ええ、そうよ。私よ。香織、体はどう？　違和感はない？」

「う、うん。平気だよ。ちよつと怠いけど……寝てたからだろうし……」

「そうね、もう五日も眠っていたのだも……怠くもなるわ」

そうやって体を起こそうとする香織を補助し苦笑いしながら、どれくらい眠っていたのかを伝える雫。香織はそれに反応する。

「五日？　そんなに……どうして……私、確か迷宮に行つて……それで……」

徐々に焦点が合わなくなっていく目を見て、マズイと感じた雫が咄嗟に話を逸らそうとする。しかし、香織が記憶を取り戻す方が早かつ

た。

「それで……あ……………南雲くんと風間くんは？」

「ッ……それは」

苦しげな表情でどう伝えるべきか悩む雫。そんな雫の様子で自分の記憶にある悲劇が現実であったことを悟る。だが、そんな現実を容易に受け入れられるほど香織は出来ていない。

「……嘘だよ、ね。そうでしょ？ 雫ちゃん。私が気絶した後、南雲くんも風間くんも助かったんだよね？ ね、ね？ そうでしょ？ ここ、お城の部屋だよね？ 皆で帰ってきたんだよね？ 二人は……訓練かな？ 訓練所にいるよね？ うん……私、ちよつと行ってくるね。ちゃんと二人にお礼言わなきゃ……だから、離して？ 雫ちゃん」

現実逃避するように次から次へと言葉を紡ぎハジメを探しに行こうとする香織。そんな香織の腕を掴み離そうとしない雫。

雫は悲痛な表情を浮かべながら、それでも決然と香織を見つめる。

「……香織。わかっているでしょう？ ……ここに彼らはいないわ」

「やめて……」

「香織の覚えている通りよ」

「やめてよ……」

「二人は……」

「いや、やめてよ……やめてったら！」

「香織！ 二人は死んだのよ！」

「ちがう！ 死んでなんかない！ 絶対、そんなことない！ どうして、そんな酷いこと言うの！ いくら雫ちゃんでも許さないよ！」

イヤイヤと首を振りながら、何とか雫の拘束から逃れようと暴れる香織。雫は絶対離してなるものかとキツく抱き締める。ギュツと抱き締め、凍える香織の心を温めようとする。

「離して！ 離してよお！ 南雲くんも風間くんも探しに行かないや！ お願いだからあ……絶対、生きてるんだからあ……離してよお」  
いつしか香織は「離して」と叫びながら雫の胸に顔を埋め泣きじやくっていた。

縫り付くようにしがみつき、喉を枯らさんばかりに大声を上げて泣く。雫も同じく泣いていた、だってあんなに友達思いのライキまでもが……

どれくらいそうしていたのか、窓から見える明るかった空は夕日に照らされ赤く染まっていた。

「香織……」

「……雫ちゃん……南雲くんも風間くんも……落ちたんだね……ここにはいないんだね……」

囁くような、今にも消え入りそうな声で香織が呟く。雫は誤魔化さない。誤魔化して甘い言葉を囁けば一時的な慰めにはなるだろう。しかし、結局それは、後で取り返しがつかないくらいの傷となって返ってくるのだ。これ以上、親友が傷つくのは見ていられない。

「うん……」

「あの時、二人は私達の魔法が当たりそうになってた……誰なの？」

「わからないわ。誰も、あの時のことには触れないようにしてる。怖いよね。もし、自分だったらって……」

「そっか」

「恨んでる？」

「……わからないよ。もし誰かわかったら……きっと恨むと思う。でも……分からないなら……その方がいいと思う。きっと、私、我慢できないと思うから……」

「そう……」

俯いたままポツリポツリと会話する香織。やがて、真っ赤になった目をゴシゴシと拭いながら顔を上げ、雫を見つめる。そして、決然と宣言した。

「ごめんね？……雫ちゃんだって辛いのに……」

「え……あ……」

瞼を擦るといつの間にか涙が溜まっていた。

「風間くんに恋……してたんだよね？」

「……けど……してたとしても、もう」

「だったら……一緒に探そう？」

「……え？」

香織の目を見つめる。香織の目には揺るぎのない炎が宿っているように感じた。まだ諦めていないのだ。

普通に考えれば、香織の言っている可能性などゼロパーセントであると切って捨てていい話だ。あの奈落に落ちて生存を信じるなど現実逃避と断じられるのが普通だ。

おそらく、幼馴染である光輝や龍太郎も含めてほとんどの人間が香

織の考えを正そうとするだろう。

だからこそ……

「もちろんいいわよ。納得するまでとことん付き合うわ」

「雫ちゃん！」

香織は雫に抱きつき「ありがとう！」と何度も礼をいう。「礼なんて不要よ、親友でしょ？」と、どこまでも男前な雫。現代のサムライガールの称号は伊達ではなかった。

その時、不意に部屋の扉が開けられる。

「雫！ 香織はめざ……め……」

「おう、香織はどう……だ……」

光輝と龍太郎だ。香織の様子を見に来たのだろう。訓練着のまま来たようで、あちこち薄汚れている。

あの日から、二人の訓練もより身が入ったものになった。二人もハジメの死に思うところがあつたのだろう。何せ、撤退を渋った挙句返り討ちにあい、あわや殺されるという危機を救ったのはハジメなのだ。もう二度とあんな無様は晒さないと相当気合が入っているようである。

そんな二人だが、現在、部屋の入り口で硬直していた。訝しそうに雫が尋ねる。

「あんた達、どうし……」

「す、すまん！」

「じゃ、邪魔したな！」



雫の疑問に対して喰い気味に言葉を被せ、見てはいけないものを見てしまったという感じで慌てて部屋を出ていく。そんな二人を見て、香織もキョトンとしている。しかし、聡い雫はその原因に気がついた。

現在、香織は雫の膝の上に座り、雫の両頬を両手で包みながら、今にもキスできそうな位置まで顔を近づけているのだ。雫の方も、香織を支えるように、その細い腰と肩に手を置き抱き締めているように見える。

つまり、激しく百合百合しい光景が出来上がっているのだ。ここが漫画の世界なら背景に百合の花が咲き乱れていることだろう。

雫は深々と溜息を吐くと、未だ事態が飲み込めずキョトンとしている香織を尻目に声を張り上げた。

「さっさと戻ってきなさい！ この大馬鹿者ども！」

## 第18話

始まりはその虚無を瞳を見た時からだった、何事にも無関心で人と話すことさえ億劫だと言わんばかりのこの世に何の感情も抱いていないかのような瞳……

はつきり言って嫌いだった……なのに

見てしまった

南雲ハジメと話している時、ノートに何かの設計図らしきもの

を書いている彼の顔が

どうしようも無く、愛おしくて、カッコよかったのである

光輝達勇者一行は、再び【オルクス大迷宮】にやって来ていた。但し、訪れているのは光輝達勇者パーティーと、小悪党組、それに永山重吾という大柄な柔道部の男子生徒が率いる男女五人のパーティーだけだった。

理由は簡単だ。話題には出さなくとも、あの二人の死が、多くの生徒達の心に深く重い影を落としてしまったのである。『戦いの果ての死』というものを強く実感させられてしまい、まともに戦闘などできなくなっただ。一種のトラウマというやつである。

当然、聖教教会関係者はいい顔をしなかった。実戦を繰り返し、時

が経てばまた戦えるだろうと、毎日のようにやんわり復帰を促して  
くる。

しかし、それに猛然と抗議した者がいた。愛子先生だ。

愛子は、当時、遠征には参加していなかった。作農師という特殊な  
つ激レアな天職のため、実戦訓練するよりも、教会側としては農地開  
拓の方に力を入れて欲しかったのである。愛子がいれば、糧食問題は  
解決してしまう可能性が限りなく高いからだ。

そんな愛子は二人の死亡を知るとショックのあまり寝込んでし  
まった。自分が安全圏でのんびりしている間に、生徒が死んでしまっ  
たという事実には、全員を日本に連れ帰ることができなくなったとい  
うことに、責任感の強い愛子は強いショックを受けたのだ。

だからこそ、戦えないという生徒をこれ以上戦場に送り出すことな  
ど断じて許せなかった。

愛子の天職は、この世界の食料関係を一変させる可能性がある激レ  
アである。その愛子先生が、不転の意志で生徒達への戦闘訓練の強  
制に抗議しているのだ。関係の悪化を避けたい教会側は、愛子の抗議  
を受け入れた。

結果、自ら戦闘訓練を望んだ勇者パーティーと小悪党組、永山重吾  
のパーティーのみが訓練を継続することになった。そんな彼等は、再

び訓練を兼ねて「オルクス大迷宮」に挑むことになったのだ。今回もメルド団長と数人の騎士団員が付き添っている。

今日で迷宮攻略六日目。

現在の階層は六十層だ。確認されている最高到達階数まで後五層である。

しかし、光輝達は現在、立ち往生していた。正確には先へ行けないのではなく、何時かの悪夢を思い出して思わず立ち止まってしまったのだ。

そう、彼等の目の前には何時かのものとは異なるが同じような断崖絶壁が広がっていたのである。次の階層へ行くには崖にかかった吊り橋を進まなければならぬ。それ自体は問題ないが、やはり思い出してしまうのだろう。特に、香織と雫は、奈落へと続いているかのような崖下の闇をジツと見つめたまま動かなかった。

あの二人の死はほぼ確定事項だ。その生存は絶望的と言うのも生温い。それでも、逃避でも否定でもなく、自らの納得のため香織と雫は崖を見下ろしていた。

だが、そんな空気は読まないのが勇者クオリティー。光輝の目には、眼下を見つめる二人の姿が、ハジメとライキの死を思い出し嘆いているように映った。クラスメイトの死に、優しい香織は今も苦しんでいるのだと結論づけた。故に、思い込みというフィルターがかかり、微笑む香織の姿も無理しているようにしか見えない。

そして、香織がハジメを特別に想っていて、まだ生存の可能性を信じているなどと露ほどにも思っていない光輝は、度々、香織にズレた慰めの言葉をかけてしまうのだ。

「香織……君の優しいところ俺は好きだ。でも、クラスメイトの死に、何時までも囚われていちやいけない！ 前へ進むんだ。きつと、南雲も風間もそれを望んでる」

「ちよつと、光輝……」

「雫もだ！ 例え厳しくても、幼馴染である俺が言わないといけないんだ。……香織、大丈夫だ。俺が傍にいる。俺は死んだりしない。もう誰も死なせはしない。香織を悲しませたりしないと約束するよ」

「はあく、何時もの暴走ね……香織……」

「あはは、大丈夫だよ、雫ちゃん。……えつと、光輝くんも言いたいことは分かったから大丈夫だよ」

「そうか、わかってくれたか！」

光輝の見当違い全開の言葉に、香織は苦笑いするしかない。おそらく、今の香織の気持ちを素直に話しても、光輝には伝わらないだろう。

光輝の中で二人は既に死んだことになっている。故に、香織の訓練への熱意や迷宮攻略の目的がハジメの生存を信じてのものとは考えられない。自分の信じたことを疑わず貫き通す性分は、そんな香織の気持ちも、現実逃避をしているか心を病んでしまっていると解釈するだろう。

長い付き合い故に、光輝の思考パターンを何となく分かってしまう香織は、だからこそ何も言わず合わせるのだった。

ちなみに、完全に口説いているようにしか思えないセリフだが、本人は至って真面目に下心なく語っている。光輝の言動に慣れてしまっている雫と香織は普通にスルーしているが、他の女子生徒なら甘いマスクや雰囲気と相まって一発で落ちているだろう。

普通、イケメンで性格もよく文武両道とくれば、その幼馴染の女の子は惚れていそうなものだが、雫は小さい頃から実家の道場で大人の門下生と接していたこと、厳格な父親の影響、そして天性の洞察力で光輝の欠点とも言えるべき正義感に気がついていたことから、それに振り回される事も多く幼馴染として以上の感情を抱いていなかった。もともと、他の人よりは大切であることに変わりはないが。

香織は生来の恋愛鈍感スキルと雫から色々聞かされているので、光輝の言動にときめく事ができない。いい人だと思っっているし、幼馴染として大切にも思っているが恋愛感情には結びつかなかった。

「香織ちゃん、私、応援しているから、出来ることがあつたら言ってね」「そうだよ、鈴は何時でもカオリンの味方だからね！」

光輝との会話を傍で聞いていて、会話に参加したのは中村恵里と谷口鈴だ。二人共、高校に入ってからではあるが香織達の親友と言っっている程仲の良い関係で、光輝率いる勇者パーティーにも加わっている実力者だ。

中村恵里はメガネを掛け、ナチュラルボブにした黒髪の美人である。性格は温和で大人しく基本的に一歩引いて全体を見ているポジションだ。本が好きで、まさに典型的な図書委員といった感じの女の子である。実際、図書委員である。

谷口鈴は、身長百四十二センチのちみっ子である。もともと、その小さな体には、何処に隠しているのかと思うほど無尽蔵の元気が詰まっており、常に楽しげでチョロリンと垂れたおさげと共にぴよんぴよんと跳ねている。その姿は微笑ましく、クラスのマスコットの存在だ。

そんな二人も、ハジメとライキが奈落に落ちた日の香織の取り乱し様に、その気持ちを悟り、香織の目的にも賛同してくれている。

「うん、恵里ちゃん、鈴ちゃん、ありがとう」

高校で出来た親友二人に、嬉しげに微笑む香織。

「うう、カオリンは健気だねえ、南雲君と風間君め！ 二人をこんなに悲しませて！ 生きてなかったら鈴が殺っちゃうんだからね！」  
「す、鈴？ 生きてなかったら、その、こ、殺せないと思うよ？」  
「細かいことはいいの！ そうだ、死んでたらエリリンの降霊術でカオリンに侍せちゃえばいいんだよ！」

「す、鈴、デリカシーないよ！ 香織ちゃんは、南雲君は生きてるって信じてるんだから！ それに、私、降霊術は……」

鈴が暴走し恵里が諫める。それがデフォだ。

何時も通りの光景を見せる姦しい二人に、楽しげな表情を見せる香織と雫。ちなみに、光輝達は少し離れているので聞こえていない。肝心な話やセリフに限って聞こえなくなる難聴スキルは、当然の如く光輝にも備わっている。

「恵里ちゃん、私は気にしてないから平気だよ？」

「私も大丈夫だからそれくらいにしなさい。恵里が困ってるわよ？」

香織と雫の苦笑い混じりの言葉に「むう」と頬を膨らませる鈴。恵里は、香織が鈴の言葉を本気で気にしていない様子にホツとしながら、降霊術という言葉に顔を青褪めさせる。

「エリリン、やっぱり降霊術苦手？ せっかくの天職なのに……」

「……うん、ごめんね。ちゃんと使えれば、もつと役に立てるのに……」

「恵里。誰にだって得手不得手はあるわ。魔法の適性だって高いんだから気にすることないわよ？」



「そうだよ、恵里ちゃん。天職って言っても、その分野の才能があるというだけで好き嫌いとは別なんだから。恵里ちゃんの魔法は的確で正確だから皆助かってるよ？」

「うん、でもやっぱり頑張って克服する。もっと、皆の役に立ちたいから」

恵里が小さく拳を握って決意を表す。鈴はそんな様子に「その意気だよ、エリリン！」とびよんぴよん飛び跳ね、香織と雫は友人の頑張りに頬を緩める。

恵里の天職は、《降霊術師》である。

闇系魔法は精神や意識に作用する系統の魔法で、実戦などでは基本的に対象にバッドステータスを与える魔法と認識されている。

降霊術は、その闇系魔法の中でも超高難度魔法で、死者の残留思念に作用する魔法だ。聖教教会の司祭の中にも幾人かの使い手がおり、死者の残留思念を汲み取り遺族等に伝えるという何とも聖職者らしい使用方法がなされている。

もっとも、この魔法の真髄は其処ではない。この魔法の本当の使い方は、遺体の残留思念を魔法で包み実体化の能力を与えて使役したり、遺体に憑依させて傀儡化するというものだ。つまり、生前の能力や実力を劣化してはいるが発揮できる死人、それを使役できるのである。また、生身の人間に憑依させることでその技術や能力をある程度トレースすることもできる。

しかし、ある程度の受け答えは出来るものの、その見た目は青白い顔をした生気のない、まさに幽霊という感じであり、また死者を使役するということに倫理的な嫌悪感を覚えてしまうので、恵里はこの術の才能があつてもまるで使えていなかった。

そんな女子四人の姿を、正確には香織を、後方から暗い瞳で見つめる者がいた。檜山大介である。あの日、王都に戻ってしばらく経ち、生徒達にも落ち着きに戻ってきた頃、案の定、あの窮地を招いた檜山には厳しい批難が待っていた。

檜山は当然予想していたので、唯ひたすら土下座で謝罪するに徹した。こういう時、反論することが下策以外のなにものでもないと思っていたからだ。特に、謝罪するタイミングと場所は重要だ。

檜山の狙いは光輝の目の前での土下座である。光輝なら確実に謝罪する自分を許しクラスメイトを執り成してくれると予想していたのである。

その予想は功を奏し、光輝の許しの言葉で檜山に対する批難は収まった。香織も元来の優しさから、涙ながらに謝罪する檜山を特段責めるようなことはしなかった。檜山の計算通りである。

もつとも、雫は薄々檜山の魂胆に気がついており、幼馴染を利用したことに嫌悪感を抱いたようだが。

また、例の人物からの命令も黙々とこなした。とても恐ろしい命令だった。戦慄すべき命令だった。強烈な忌避感を感じたが、一線を越えてしまった檜山は、もう止まることができなかった。

しかし、クラスにごく自然と溶け込みながら裏では恐ろしい計画を練っているその人物に、檜山は畏怖と同時に歓喜の念も抱いていた。

(あいつは狂ってやがる。……だが、付いて行けば香織は俺の……)

言うことを聞けば香織が手に入る、その言葉に暗い喜びを感じ思わず口元に笑みが浮かぶ檜山。

「おい、大介？　どうかしたのか？」

檜山のおかしな様子に、近藤や中野、斎藤が怪訝そうな表情をしている。この三人は今でも檜山とつるんでいる。元々、類は友を呼ぶと言うように似た者同士の四人。一時期はギクシヤクしたもの、檜山の殊勝な態度に友情を取り戻していた。

もつとも、それが本当の意味での友情と言えるかは甚だ微妙ではあるが……

「い、いや、何でもない。もう六十層を越えたんだと思うと嬉しくてな」

「あく、確かにな。あと五層で歴代最高だもんな」

「俺等、相当強くなってるよな。全く、居残り組は根性なさすぎだろ」  
「まあ、そう言うなって。俺らみたいな方が特別なんだからよ」

檜山の誤魔化しに、特に何の疑問も抱かず同調する三人。

戦い続ける自分達を特別と思って調子づいているのは小悪党が小悪党たる所以だろう。王宮でも居残り組に対して実に態度がでかい。横柄な態度に苦情が出ているくらいだ。しかし、六十層を突破できるだけの確かな実力があるので、強く文句を言えないところである。

もつとも、勇者パーティーには及ばないので、彼らも光輝達の傍では実に大人しい。小物らしい行動原理である。一行は特に問題もなく、遂に歴代最高到達階層である六十五層にたどり着いた。

「気を引き締めろ！　ここのマップは不完全だ。何が起こるかわからんからな！」

付き添いのメルド団長の声が響く。光輝達は表情を引き締め未知の領域に足を踏み入れた。しばらく進んでいると、大きな広間に出た。何となく嫌な予感がする一同。

その予感的中した。広間に侵入すると同時に、部屋の中央に魔法陣が浮かび上がったのだ。赤黒い脈動する直径十メートル程の魔法陣。それは、とても見覚えのある魔法陣だった。

「ま、まさか……アイツなのか!?!」

光輝が額に冷や汗を浮かべながら叫ぶ。他のメンバーの表情にも緊張の色がはつきりと浮かんでいた。

「マジかよ、アイツは死んだんじゃないのかよ!」

龍太郎も驚愕をあらわにして叫ぶ。それに応えたのは、険しい表情をしながらも冷静な声音のメルド団長だ。

「迷宮の魔物の発生原因は解明されていない。一度倒した魔物と何度も遭遇することも普通にある。気を引き締めろ! 退路の確保を忘れるな!」

いざと言う時、確実に逃げられるように、まず退路の確保を優先する指示を出すメルド団長。それに部下が即座に従う。だが、光輝がそれに不満そうに言葉を返した。

「メルドさん。俺達はもうあの時の俺達じゃありません。何倍も強くなったんだ! もう負けはしない! 必ず勝ってみせます!」

「へっ、その通りだぜ。何時までも負けっぱなしは性に合わねえ。こらでりベンジマッチだ!」

龍太郎も不敵な笑みを浮かべて呼応する。メルド団長はやれやれと肩を竦め、確かに今の光輝達の実力なら大丈夫だろうと、同じく不敵な笑みを浮かべた。

そして、遂に魔法陣が爆発したように輝き、かつての悪夢が再び光輝達の前に現れた。

「グウガアアアア!!!」

咆哮を上げ、地を踏み鳴らす異形。ベヒモスが光輝達を壮絶な殺意を宿らせた眼光で睨むのであった。

## 第19話

「万翔羽ばたき 天へと至れ 『天翔閃』！」

曲線状の光の斬撃がベヒモスに轟音を響かせながら直撃する。以前は、『天翔閃』の上位技『神威』を以てしてもカスリ傷さえ付けることができなかった。しかし、何時までもあの頃のままではないという光輝の宣言は、結果を持って証明された。

「グウルガアアア!?!」

悲鳴を上げ地面を削りながら後退するベヒモスの胸にはくつきりと斜めの剣線が走り、赤黒い血を滴らせていたのだ。

「いける！ 俺達は確実に強くなってる！ 永山達は左側から、檜山達は背後を、メルド団長達は右側から！ 後衛は魔法準備！ 上級を頼む！」

光輝が矢継ぎ早に指示を出す。メルド団長直々の指揮官訓練の賜物だ。

「ほう、迷いなくいい指示をする。聞いたな？ 総員、光輝の指揮で行くぞ！」

メルド団長が叫び騎士団員を引き連れベヒモスの右サイドに回り込むべく走り出した。それを期に一斉に動き出し、ベヒモスを包囲する。

前衛組が暴れるベヒモスを後衛には行かすまいと必死の防衛線を張る。

「グルウアアア!!」

ベヒモスが踏み込みで地面を粉碎しながら突進を始める。

「させるかつ!」

「行かせん!」

クラスの二大巨漢、坂上龍太郎と永山重吾がスクラムを組むようにベヒモスに組み付いた。

「猛り地を割る力をここに! 剛力!」

身体能力、特に膂力を強化する魔法を使い、地を滑りながらベヒモスの突進を受け止める。

「ガアアア!!」

「らああああ!!」

「おおおお!!」

三者三様に雄叫びをあげ力を振り絞る。ベヒモスは矮小な人間ごときに完全には止められないまでも勢いを殺され苛立つように地を踏み鳴らした。

その隙を他のメンバーが逃さない。

「全てを切り裂く至上の一閃 絶断!」

雫の抜刀術がベヒモスの角に直撃する。魔法によって切れ味を増したアーティファクトの剣が半ばまで食い込むが切断するには至らない。

「ぐっ、相変わらず堅い！」

「任せろ！ 粉碎せよ、破碎せよ、爆砕せよ 『豪撃』！」

メルド団長が飛び込み、半ばまで刺さった雫の剣の上から自らの騎士剣を叩きつけた。魔法で剣速を上げると同時に腕力をも強化した鋭く重い一撃が雫の剣を押し込むように衝撃を与える。

そして、遂にベヒモスの角の一本が半ばから断ち切られた。

「ガアアアアア!？」

角を切り落とされた衝撃にベヒモスが渾身の力で大暴れし、永山、龍太郎、雫、メルド団長の四人を吹き飛ばす。

「優しき光は全てを抱く 『光輪』！」

衝撃に息を詰まらせ地面に叩きつけられそうになった四人を光の輪が無数に合わさって出来た網が優しく包み込んだ。香織が行使した、形を変化させることで衝撃を殺す光の防御魔法だ。

香織は間髪入れず、回復系呪文を唱える。

「天恵よ 遍く子らに癒しを 『回天』」

香織の詠唱完了と同時に触れてもいないのに四人が同時に癒されていく。遠隔の、それも複数人を同時に癒せる中級光系回復魔法だ。以前使った『天恵』の上位版である。



光輝が突きの構えを取り、未だ暴れるベヒモスに真つ直ぐ突進した。そして、先ほどの傷口に切っ先を差し込み、突進中に詠唱を終わらせて魔法発動の最後のトリガーを引く。

「“光爆”！」

聖剣に蓄えられた膨大な魔力が、差し込まれた傷口からベヒモスへと流れ込み大爆発を起こした。

「ガアアアア!!」

傷口を抉られ大量の出血をしながら、技後硬直中の僅かな隙を逃さずベヒモスが鋭い爪を光輝に振るった。

「ぐうぐう!!」

呻き声を上げ吹き飛ばされる光輝。爪自体はアーティファクトの聖鎧が弾いてくれたが、衝撃が内部に通り激しく咳き込む。しかし、その苦しみも一瞬だ。すかさず、香織の回復魔法がかけられる。

「天恵よ 彼の者に今一度力を “焦天”」

先ほどの回復魔法が複数人を対象に同時回復できる代わりに効果が下がるものとすれば、これは個人を対象に回復効果を高めた魔法だ。光輝は光に包まれ一瞬で全快する。

ベヒモスが、光輝が飛ばされた間奮闘していた他のメンバーを咆哮と跳躍による衝撃波で吹き飛ばし、折れた角にもお構いなく赤熱化させていく。

「……角が折れても出来るのね。あれが来るわよ！」

雫の警告とベヒモスの跳躍は同時だった。ベヒモスの固有魔法は経験済みなので皆一斉に身構える。しかし、今回のベヒモスの跳躍距離は予想外だった。何と、光輝達前衛組を置き去りにし、その頭上を軽々と超えて後衛組にまで跳んだのだ。大橋での戦いでは直近にしか跳躍しなかったし、あの巨体でここまで跳躍できるとは夢にも思わず、前衛組が焦りの表情を見せる。

だが、後衛組の一人が呪文詠唱を中断して、一步前に出た。谷口鈴だ。

「ここは聖域なりて 神敵を通さず 『聖絶』!!」

呪文の詠唱により光のドームができるのとベヒモスが隕石のごとく着弾するのは同時だった。凄まじい衝撃音と衝撃波が辺りに撒き散らされ、周囲の石畳を蜘蛛の巣状に粉碎する。

しかし、鈴の発動した絶対の防御はしっかりとベヒモスの必殺を受け止めた。だが、本来の四節からなる詠唱ではなく、二節で無理やり展開した詠唱省略の『聖絶』では本来の力は発揮できない。

実際、既に障壁にはヒビが入り始めている。天職『結界師』を持つ鈴でなければ、ここまで持たせるところか、発動すら出来なかっただろう。鈴は歯を食いしばり、二節分しか注げない魔力を注ぎ込みながら、必死に両手を掲げてそこに絶対の障壁をイメージする。ヒビ割れた障壁など存在しない。自分の守りは絶対だと。

「うううう！ 負けるもんかあー！」

障壁越しにベヒモスの殺意に満ちた眼光が鈴を貫き、全身を襲う恐

怖と不安に、掲げた両手が震える。弱気を払って必死に叫ぶが限界はもうそこだ。ベヒモスの攻撃は未だ続いており、もう十秒も持たない。

破られる！鈴がそう心の内で叫んだ瞬間、

「天恵よ 神秘をここに 〃譲天〃」

鈴の体が光に包まれ、〃聖絶〃に注がれる魔力量が跳ね上がった。香織の回復系魔法だ。本来は、他者の魔力を回復させる魔法だが、魔法陣に注ぐ魔力に合わせて発動することで、流入量を本来の量まで増幅させることができる。〃譲天〃の応用技だ。天職〃治癒師〃である香織だからこそできる魔法である。

「これなら！ カオリン愛してる！」

鈴は、一気に本来の四節分の魔力が流れ込むと同時に完璧な〃聖絶〃を張り直す。パシントと乾いた音を響かせ障壁のヒビが一瞬で修復された。ベヒモスは、障壁を突破できないことに苛立ち、怒りも表に生意気な術者を睨みつけるが、鈴も気丈に睨み返し一步も引かない。

そして遂に、ベヒモスの角の赤熱化が効果を失い始めた。ベヒモスが突進力を失って地に落ちる。同時に、鈴の〃聖絶〃も消滅した。

肩で息をする鈴にベヒモスが狙いを定めるが、既に前衛組がベヒモスに肉薄している。

「後衛は後退しろ！」

光輝の指示に後衛組が一気に下がり、前衛組が再び取り囲んだ。ヒット&アウェイでベヒモスを翻弄し続け、遂に待ちに待った後衛の

詠唱が完了する。

「下がって！」

後衛代表の恵里から合図がでる。光輝達は、渾身の一撃をベヒモスに放ちつつ、その反動も利用して一気に距離をとった。

その直後、炎系上級攻撃魔法のトリガーが引かれた。

「「「「炎天」」」」

術者五人による上級魔法。超高温の炎が球体となり、さながら太陽のように周囲一帯を焼き尽くす。ベヒモスの直上に創られた「炎天」は一瞬で直径八メートルに膨らみ、直後、ベヒモスへと落下した。

絶大な熱量がベヒモスを襲う。あまりの威力の大きさに味方までダメージを負いそうになり、慌てて結界を張っていく。「炎天」は、ベヒモスに逃げる暇すら与えずに、その堅固な外殻を融解していった。

「グウルアガアアアアア!!!」

ベヒモスの断末魔が広間に響き渡る。いつか聞いたあの絶叫だ。鼓膜が破れそうなほどのその叫びは少しずつ細くなり、やがて、その叫びすら燃やし尽くされたかのように消えていった。

そして、後には黒ずんだ広間の壁と、ベヒモスの物と思しき僅かな残骸だけが残った。

「か、勝ったのか？」

「勝ったんだろ……」

「勝っちゃったよ……」

「マジか？」

「マジで？」

皆が皆、呆然とベヒモスがいた場所を眺め、ポツリポツリと勝利を確認するように呟く。同じく、呆然としていた光輝が、我を取り戻したのかスッと背筋を伸ばし聖剣を頭上へ真っ直ぐに掲げた。

「そうだ！俺達の勝ちだ！」

キラリと輝く聖剣を掲げながら勝鬨を上げる光輝。その声に漸く勝利を実感したのか、一斉に歓声が沸きあがった。男子連中は肩を叩き合い、女子達はお互いに抱き合つて喜びを表にしている。メルド团长達も感慨深そうだ。

そんな中、未だにボーとベヒモスのいた場所を眺めている香織と雫が居た。

「香織？」

「なに？」

「ここまで来たのよね……」

「うん……雫ちゃん、もっと先へ行けば南雲くんも風間くんも……」

「それを確かめに行くんでしょ？そのために頑張っているんじゃない？」

「えへへ、そうだね」

先へ進める。それはハジメの安否を確かめる具体的な可能性があることを示している。答えが出てしまう恐怖に、つい弱気がでたのだろう。それを察して、雫がグツと力を込めて香織の手を握った。

その力強さに香織も弱気を払ったのか、笑みを見せる。

そんな二人の所へ光輝達も集まってきた。

「二人共、無事か？ 香織、最高の治癒魔法だったよ。香織がいれば何も怖くないな！」

爽やかな笑みを浮かべながら香織と雫を労う光輝。

「ええ、大丈夫よ。光輝は……まあ、大丈夫よね」

「うん、平気だよ、光輝くん。皆の役に立ててよかったよ」

同じく微笑をもつて返す二人。しかし、次ぐ光輝の言葉に少し心に影が差した。

「これで、二人も浮かべられるな。自分を突き落とした魔物を自分が守ったクラスメイトが討伐したんだから」

「……………」

光輝は感慨にふけった表情で雫と香織の表情には気がついていない。どうやら、光輝の中で二人を奈落に落としたのはベヒモスのみ：という事になっているらしい。確かに間違いではない。直接の原因はベヒモスの固有魔法による衝撃で橋が崩落したことだ。しかし、より正確には、撤退中のハジメに魔法が撃ち込まれてしまいそれをライキが助けようとしたことだ。

今では、暗黙の了解としてその時の話はしないようになっていたが、事実は変わらない。だが、光輝はその事実を忘れてしまったのか意識していないのかベヒモスさえ倒せばハジメは浮かべれると思っっているようだ。基本、人の善意を無条件で信じる光輝にとって、過失というものは何時までも責めるものではないのだろう。まして、故意に為されたなどは夢にも思わないだろう。

しかし、香織は気にしないようにしていても忘れることはできな

い。『誰か』を知らないから耐えられているだけで、知れば必ず責め立ててしまうのは確実だ。だからこそ、なかつた事になっている光輝の言葉に少しショックを受けてしまった。

雫が溜息を吐く。思わず文句を言いたくなつたが、光輝に悪気がないのは何時ものことだ。むしろ精一杯、ハジメの事も香織のことも思つての発言である。ある意味、だからこそタチが悪いのだが。それに、周りには喜びに沸くクラスメイトがいる。このタイミングで、あの時の話をするほど雫は空気が読めない女ではなかつた。

若干、微妙な空気が漂う中、クラス一の元気っ子が飛び込んできた。

「カツオリくん！」

そんな奇怪な呼び声とともに鈴が香織にヒシツと抱きつく。

「ふわっ!？」

「えへへ、カオリン超愛してるよ〜! カオリンが援護してくれなかつたらペッシャンコになつてるところだよ〜」

「も、もう、鈴ちゃんつたら。つて何処触つてるの!」

「げへへ、ここがええのんか? ここがええんやつへぶう!？」

鈴の言葉に照れていると、鈴が調子に乗り変態オヤジの如く香織の体をまさぐる。それに雫が手刀で対応。些か激しいツツコミが鈴の脳天に炸裂した。

「いい加減にしなさい。誰が鈴のものなのよ……香織は私のよ?」

「雫ちゃん!？」

「ふっ、そうはさせないよ〜、カオリンとピーでピーなことするのは鈴なんだよ!」

「鈴ちゃん!?! 一体何する気なの!?!」

雫と鈴の香織を挟んでのジャレ合いに、香織が忙しそうにツツコミを入れる。いつしか微妙な空気は払拭されていた。

これより先は完全に未知の領域。光輝達は過去の悪夢を振り払い先へと進むのだった。

だが……忘れるな。お前達が忘れようとしている者は既に力を手に入れた。それをお前達の為に振るうと思うか？

否、断じて否だ。バケモノとなったモノは既に貴様らを食い殺そうとしているぞ……



はは——ははは——

——あは

「……？」

「どうしたの雫ちゃん？」

「いえ、何でもないわ」

刻々と迫っている……

復讐の時は

## 第20話

ハジメとライキが再会した頃、勇者一行は、一時迷宮攻略を中断しハイリヒ王国に戻っていた。

道順のわかっている今までの階層と異なり、完全な探索攻略であることから、その攻略速度は一気に落ちたこと、また、魔物の強さも一筋縄では行かなくなってきた為、メンバーの疲労が激しいことから一度中断して休養を取るべきという結論に至ったのだ。

もつとも、休養だけなら宿場町ホルアドでもよかった。王宮まで戻る必要があったのは、迎えが来たからである。何でも、ヘルシャー帝国から勇者一行に会いに使者が来るのだという。

何故、このタイミングなのか。

元々、エヒト神による「神託」がなされてから光輝達が召喚されるまでほとんど間がなかった。そのため、同盟国である帝国に知らせが行く前に勇者召喚が行われてしまい、召喚直後の顔合わせができなかったのだ。

もつとも、仮に勇者召喚の知らせがあっても帝国は動かなかつたと考えられる。なぜなら、帝国は三百年前にとある名を馳せた傭兵が建国した国であり、冒険者や傭兵の聖地とも言うべき完全実力主義の国だからである。

突然現れ、人間族を率いる勇者と言われても納得はできないだろ

う。聖教教会は帝国にもあり、帝国民も例外なく信徒であるが、王国民に比べれば信仰度は低い。大多数の民が傭兵か傭兵業からの成り上がり者で占められていることから信仰よりも実益を取りたがる者が多いのだ。もつとも、あくまでどちらかといえばという話であり、熱心な信者であることに変わりはないのだが。

そんな訳で、召喚されたばかりの頃の光輝達と顔合わせをしても軽んじられる可能性があった。もちろん、教会を前に、神の使徒に対してあからさまな態度は取らないだろうが。王国が顔合わせを引き伸ばすのを幸いに、帝国側、特に皇帝陛下は興味を持っていなかったの、今まで関わる事がなかったのである。

しかし、今回の【オルクス大迷宮】攻略で、歴史上の最高記録である六十五層が突破されたという事実をもって帝国側も光輝達に興味を持つに至った。帝国側から是非会ってみたいという知らせが来たのだ。王国側も聖教教会も、いい時期だと了承したのである。

そんな話を帰りの馬車の中でツラツラと教えられながら、光輝達は王宮に到着した。

馬車が王宮に入り、全員が降車すると王宮の方から一人の少年が駆けて来るのが見えた。十歳位の金髪碧眼の美少年である。光輝と似た雰囲気を持つが、ずっとやんちゃそうだ。その正体はハイリヒ王子ランデル・S・B・ハイリヒである。ランデル殿下は、思わず犬耳とブンブンと振られた尻尾を幻視してしまいそうな雰囲気で駆け寄ってくる大声で叫んだ。

「香織！ よく帰った！ 待ちわびたぞ！」

もちろんこの場には、香織だけでなく他にも帰還を果たした生徒達が勢ぞろいしている。その中で、香織以外見えないという様子のラン

デル殿下の態度を見ればどういふ感情を持っているかは容易に想像つくだろう。

実は、召喚された翌日から、ランデル殿下は香織に猛アプローチを掛けていた。と言つても、彼は十歳。香織から見れば小さい子に懐かれている程度の認識であり、その思いが実る気配は微塵もない。生来の面倒見の良さから、弟のように可愛く思つてはいるようだが。

「ランデル殿下。お久しぶりです」

パタパタ振られる尻尾を幻視しながら微笑む香織。そんな香織の笑みに一瞬で顔を真っ赤にするランデル殿下は、それでも精一杯男らしい表情を作つて香織にアプローチをかける。

「ああ、本当に久しぶりだな。お前が迷宮に行つてる間は生きた心地がしなかつたぞ。怪我はしてないか？ 余がもつと強ければお前にこんなことさせないのに……」

「お気づかい下さり有難うございます。ですが、私なら大丈夫ですよ？ 自分で望んでやっていることですから」

「いや、香織に戦いは似合わない。そ、その、ほら、もつとこう安全な仕事もあるだろう？」

「安全な仕事ですか？」

ランデル殿下の言葉に首を傾げる香織。ランデル殿下の顔

は更に赤みを増す。となりで面白そうに成り行きを見ている雫は察しがついて、少年の健気なアプローチに思わず苦笑いする。

「う、うむ。例えば、侍女とかどうだ？ その、今なら余の専属にしてやってもいいぞ」

「侍女ですか？ いえ、すみません。私は治癒師ですから……」

「な、なら医療院に入ればいい。迷宮なんて危険な場所や前線なんて行く必要ないだろう?」

医療院とは、国営の病院のことである。王宮の直ぐ傍にある。要するに、ランデル殿下は香織と離れるのが嫌なのだ。しかし、そんな少年の気持ちは鈍感な香織には届かない。

「いえ、前線でなければ直ぐに癒せませんから。心配して下さい有り難うございます」

「うう」

ランデル殿下は、どうあっても香織の気持ちを動かすことができないと悟り小さく唸る。そこへ空気を読まない厄介な善意の塊、勇者光輝がにこやかに参戦する。

「ランデル殿下、香織は俺の大切な幼馴染です。俺がいる限り、絶対に守り抜きますよ」

光輝としては、年下の少年を安心させるつもりで善意全開に言ったのだが、この場においては不適切な発言だった。恋するランデル殿下にはこう意識される。

「俺の女に手を出してんじゃねえよ。俺がいる限り香織は誰にも渡さねえ! 絶対にな!」

親しげに寄り添う勇者と治癒師。実に様になる絵である。ランデル殿下は悔しげに表情を歪めると、不倶戴天の敵を見るようにキツと光輝を睨んだ。ランデル殿下の中では二人は恋人のように見えているのである。

「香織を危険な場所に行かせることに何とも思っていないお前が何を

言う！ 絶対に負けぬぞ！ 香織は余といる方がいいに決まってるのだからな！」

「えくと……」

ランデル殿下の敵意むき出しの言葉に、香織はどうしたものかと苦笑いし、光輝はキョトンとしている。雫はそんな光輝を見て溜息だ。

ガルルと吠えるランデル殿下に何か機嫌を損ねることをしてしまったのかと、光輝が更に煽りそうなセリフを吐く前に、涼やかだが、少し厳しさを含んだ声が響いた。

「ランデル。いい加減にしなさい。香織が困っているでしょう？ 光輝さんにもご迷惑ですよ」

「あ、姉上!? ……し、しかし」

「しかしではありません。皆さんお疲れなのに、こんな場所に引き止めて……相手のことを考えていないのは誰ですか？」

「うっ……で、ですが……」

「ラ・ン・デ・ル？」

「よ、用事を思い出しました！ 失礼します！」

ランデル殿下はどうしても自分の非を認めたくなかったのか、いきなり踵を返し駆けていってしまった。その背を見送りながら、王女リアーナは溜息を吐く。

「香織、光輝さん、弟が失礼しました。代わってお詫び致しますわ」

リアーナはそう言って頭を下げた。美しいストレートの金髪がさらりと流れる。

「ううん、気にしてないよ、リリイ。ランデル殿下は気を使ってくれただけだよ」

「そうだな。なぜ、怒っていたのかわからないけど……何か失礼なことをしたんなら俺の方こそ謝らないと」

香織と光輝の言葉に苦笑いするリリアーナ。姉として弟の恋心を察しているため、意中の香織に全く意識されていないランデル殿下に多少同情してしまう。まして、ランデル殿下の不倶戴天の敵は別にいることを知っているので尚更だった。

ちなみに、ランデル殿下がその不倶戴天の敵に会ったとき、一騒動起こすのだが……それはまた別の話。

リリアーナ姫は、現在十四歳の才媛だ。その容姿も非常に優れていて、国民にも大変人気のある金髪碧眼の美少女である。性格は真面目で温和、しかし、硬すぎるということもない。TPOをわきまえつつも使用人達とも気さくに接する人当たりの良さを持っている。

光輝達召喚された者にも、王女としての立場だけでなく一個人としても心を砕いてくれている。彼等が関係ない自分達の世界の問題に巻き込んでしまったと罪悪感もあるようだ。

そんな訳で、率先して生徒達と関わるリリアーナと彼等が親しくなるのに時間はかからなかった。特に同年代の香織や雫達との関係は非常に良好で、今では愛称と呼び捨て、タメ口で言葉を交わす仲である。

「いえ、光輝さん。ランデルのことは気にする必要ありませんわ。あの子が少々暴走気味なだけですから。それよりも……改めて、お帰りなさいませ、皆様。無事のご帰還、心から嬉しく思いますわ」

リリアーナそう言うと、ふわりと微笑んだ。香織や雫といった美少女が身近にいるクラスメイト達だが、その笑顔を見てこぞって頬を染

めた。リリアーナの美しさには二人にない洗練された王族としての気品や優雅さというものがあり、多少の美少女耐性で太刀打ちできるものではなかった。

現に、永山組や小悪党組の男子は顔を真っ赤にしていボーと心を奪われているし、女子メンバーですら頬をうっすら染めている。異世界で出会った本物のお姫様オーラに現代の一般生徒が普通に接しろという方が無茶なのである。昔からの親友のように接することができない香織達の方がおかしいのだ。

「ありがとう、リリイ。君の笑顔で疲れも吹っ飛んだよ。俺も、また君に会えて嬉しいよ」

さらりとキザなセリフを爽やかな笑顔で言ってしまう光輝。繰り返す言うが、光輝に下心は一切ない。生きて戻り再び友人に会えて嬉しい、本当にそれだけなのだ。単に自分の容姿や言動の及ぼす効果に病的なレベルで鈍感なだけで。

「えっ、そ、そうですか？ え、えっと」

王女である以上、国の貴族や各都市、帝国の使者等からお世辞混じりの褒め言葉をもらうのは慣れている。なので、彼の笑顔の仮面の下に隠れた下心を見抜く目も自然と鍛えられている。それ故、光輝が一切下心なく素で言っているのがわかってしまう。そういう経験は家族以外ではほとんどないので、つい頬が赤くなってしまったりリリアーナ。どう返すべきかオロオロとしてしまう。こういうギャップも人気の一つだったりする。

光輝は相変わらず、ニコニコと笑っており自分の言動が及ぼした影響に気がついていない。それに、深々と溜息を吐くのはやはり雫だった。苦労性が板についてきている。本人は断固として認めないだろ



うが。

「えっと、とにかくお疲れ様でした。お食事の準備も、清めの準備もできておりますから、ゆっくりお寛ぎくださいませ。帝国からの使者様が来られるには未だ数日は掛かりますから、お気になさらず」

どうにか乱れた精神を立て直したりリアーナは、光輝達を促した。

光輝達が迷宮での疲れを癒しつつ、居残り組にベヒモスの討伐を伝え歓声が上がったり、これにより戦線復帰するメンバーが増えたり、愛子先生が一部で「豊穡の女神」と呼ばれ始めていることが話題になり彼女を身悶えさせたりと色々あったが光輝達はゆっくり迷宮攻略で疲弊した体を癒した。

香織は内心、迷宮攻略に戻りたくてそわそわしていたが。

「ああ、すみません。それともう一つお伝えしなければ行けない事が・・・」

「何かあったんですか？」

「はい・・・実は皆様が帰ってくる少し前から迷宮で不気味な笑い声が聞こえたり、下の層から赤い光が発せられたりと不可解な減少が起こっているとの報告が・・・」

「モンスターの仕業ですか？」

「姿を見たものはいないのでまだ何とも、しかし噂では笑い声は人間に近いものだったと・・・充分にお気お付け下さい。」

「ありがとうございます。」

この笑い声や赤い光がライキのものだとは勇者一行が気づくのはもう少し先の話である。